

第2章 揖保川下流域の古景観

第1節 網干デルタの古景観—砂堆をめぐって—

網干デルタは姫路平野の西端、『播磨国風土記』（以下、『風土記』と表記する）の言う旧揖保郡の中央を流れる揖保川が、瀬戸内海に流入する河口付近を言う。

揖保川流域にはアメノヒボコ（※1）説話や8世紀初頭に編纂された『風土記』の神功皇后渡航説話（4世紀前後頃と推定）など河川や海にまつわる伝承が残されている。それら伝承の具体的な場所は現在の揖保川や林田川流路に基づいて想起されるのが普通だろう。しかし近年のいろいろな研究で、揖保川の流路は地殻の東方隆起による傾動によって、長い歳月をかけて東から西に向かって遷移した結果、現在の流路になったことが分かっている（注1）。また、揖保川河口周辺に広がる平野部は縄文時代前期末～中期頃（約5500年前）を頂点とする縄文海進以降の海退や堆積に伴う汀線の2km以上に及ぶ後退によって拡大してゆく。このように、揖保川本体の西遷や河口の南進、及び海水準の変動が複雑な景観を作り上げて来た。

従って、現在の景観から往時の景観を単純に想起することはなにがしかの誤解を招くことになるだろう。『風土記』の説話や、それ以前の景観の実相に迫る意味で、或は考古学的な遺跡の意味を考えるにあたって往時の景観を復元することは大いに意味がある。勿論、網干デルタの変化を通史的に記述することは、筆者の方のおよぶ所ではない。しかし『風土記』記述以外に資料の少ない古代景観について、当地に明確に痕跡を残した縄文期の浜堤列の形成機構に関する筆者の推定に加えて、河川流路の西方への遷移の実証など先学の到達点を踏まえて、想像逞しく迫ってみたい。また、いくつかの近世から近代の絵図（地図）資料から汀線位置の変化を推定することで、現代からその経時変化を逆追ひ出来れば、古代景観の復元に幾分か迫れるのではないかと考える。

（※1）『日本書紀』では「天日槍」、『古事記』では「天之日矛」と表記されている。

1) 8世紀初頭・『播磨国風土記』の記述

『風土記』に記述された地名や古景観が、風土記編者の時代から400～500年前の景観の伝承記憶なのか、風土記編者の時代の8世紀初頭の景観を反映したもののかなど、検討を加えてみたい。以下に神功皇后渡航説話に関する網干デルタの景観に関連した『風土記』の記述の一部を引用する（注2）。尚、推定される当時の景観については、後で紹介する図10・図20を参照されたい。

【原文】 宇須伎津 右 所_三以名_二宇須伎_一者 大帯日賣命 將_レ平_二韓國_一度行之時 御船宿_二於宇頭川之泊_一 自_二此泊_一度_二行於伊都_一之時 忽遭_二逆風_一 不_レ得_二進行_一 而從_二船越_一々_二御船_一 御船 猶亦不_レ得_レ進 乃 追_二發百姓_一 令_レ引_二御船_一 於_レ是 有_二一女人_一 為_二資上_一己之眞子_一 而墮_二於江_一 故號_二宇須伎_一 新辭伊須須久

【書き下し文】 宇須伎津 右、宇須伎と名づくる所以は、大帯日賣命（※2）、韓國を平けむとして、度り行でましし時、御船、宇頭川の泊に宿りたまひき。比の泊より伊都に度り行でましし時、忽ち逆風に遭ひて、え進み行かずして、船越より御船を越すに、御船、猶もえ進まず。乃ち、百姓を追ひ發して、御船を引かしめき。ここに、一の女人ありて、資（※3）に己が眞子を上らむとして、江に墮ちき。故、宇須伎と號く。新の辭の伊須須久なり。（※2）大帯日賣命は神功皇后（※3）資=資人（しじん）奈良・平安時代の下級官人。

このように、宇須伎津、宇頭川、伊都、宇須伎（別名 伊須須久）、船越など、海や川に関わる地名が登場する。伊津、船越は現在も生きた地名で、また宇須伎（魚吹）は神社名として継承されている。

2) 揖保川西遷

網干デルタの形成に主要な役割を果たした揖保川の流路変遷について、先学の知見を紹介する。図1は「石見神社社記による揖保川の変遷図」（注3）、図2は揖保川流路変遷の概要で、11世紀から16世紀（ほぼ現在）までの遷移状況を示す（注4）。図3は、「推定旧流路と弥生前期遺跡」（注5）である。



図1 石見神社社記による揖保川の変遷図



図2 揖保川流路変遷の概要図



図3 推定旧流路と弥生前期遺跡

揖保川最下流域、所謂網干デルタの河川流路は時代ごとに複雑に錯綜していたことが想像できる。17世紀初頭になると西遷は落ち着き、明治時代中頃（19世紀末頃）には流路はほぼ固定して現在の河道となった（注6）。

3) 網干デルタ古景観の復元資料・前提

『揖保川町史』には、「八世紀以前における宇頭川（揖保川の古名）の流路は、さらに十一世紀の流路より東の位置を流れていた可能性がある。それは宇頭川泊（姫路市網干区津市場付近）・宇須伎津（姫路市網干区宮内の魚吹八幡神社付近）がいずれも宇頭川の河口と考えられることと符合する。」とある（注7）。しかし、複列の浜堤列（砂堆列）や河口部の三角州・自然堤防の形成過程についての記述は少ない。現在の揖保川の西に存在する山塊に西遷を阻まれた結果、河口部に三角州・自然堤防を成長させたとするが、詳細な説明は乏しい。そこで、図20「網干デルタ古景観の復元模索と遺跡分布—砂堆をめぐる—」と図10「砂堆形成の機構推定」、図11「第5砂堆を考慮した砂堆配列」を作成した。これらは、浜堤列に着目して流路や河口部の変遷を示した図である。図20は、『御津町史』第一巻「網干デルタの地形分類図」（注8）を基にしたもので、『揖保川町史』掲載の図資料、及び揖保川「西遷説」等を盛り込んだものである。図10・図11は図20と同じデータを用いて「流路を規制した微高地」や「第4砂堆」・「第5砂堆」について考えたものである。

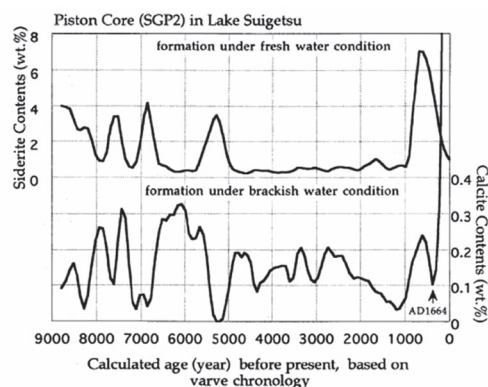
4) 浜堤列^{ひんていれつ}（以下、「砂堆」または「砂堆列」と表記する）の形成といくつかの研究事例

網干デルタの特徴の一つは、その東側に明瞭な4列の砂堆が形成されていることである。高橋学氏は、砂堆列を北から順に第1→第4砂堆としている（注9）。縄文海進最盛期ころを海水面の頂点とし、その後の海退期に汀線の後退が進む過程で一時的な滞留が生じた時期に、沿岸流によって運ばれた砂が帯状に堆積したものが砂堆である。砂は主に揖保川が運んだものである。そして、この海退と滞留が繰り返された結果、砂堆列が形成される。砂堆列の形成は日本列島沿岸に多くみられる自然現象である。砂堆の形成時期の推定には、ボーリングによる地質調査を始め、基盤地殻変動に伴う傾動・勾配変化、気候変動に伴う環境変化、海退速度、滞留期間及び考古学的遺物とその年代比定や実年代測定などの様々な研究成果を考慮しなければならない。

ところで、気候変動による海水準変化は外洋、内海を問わず影響を受ける。当然、外洋の海水準変動は水路で繋がった内海にも影響を与える。内海の砂堆研究資料は少ないようなので、先学の外洋に面した地域の資料を参考に、網干デルタに残された砂堆について考えたい。

例1 福井県・水月湖（三方五湖）年縞と海水準変動

天然時計とされる水月湖の年縞堆積物には、海水準・降水・モンスーン変動などの気候変動要素が記録されている。垂直方向の基盤変動がなかったとする前提や、複数箇所の年縞資料の比較集成ではないことなどの点を留意しておく必要はあるが、考古学や地質学における年代測定の「世界標準ものさし」に採用されていることは周知の通りである（注10）。図4で上段は淡水量変動状態と連動した菱鉄鉱・Sideriteの、下段は塩水量変動状態と連動した方解石・Calciteの8,830年間の年縞堆積物中の含有量変動を示す。



Changes of concentrations in siderite and calcite during the Last 8,830 years, in varved sediments of Lake Suigetsu
 図4 水月湖年縞堆積物の菱鉄鉱、方解石含有変動（海水準変動）

この水月湖堆積物の解析から海水準の低下は次の時期に生じたとされる。

現在より 7000年～6800年前（縄文時代早期末～前期）

5500年～5000年前（縄文時代前期～中期）

4400年前（縄文時代中期～後期）

3600年前（縄文時代後期～晩期）

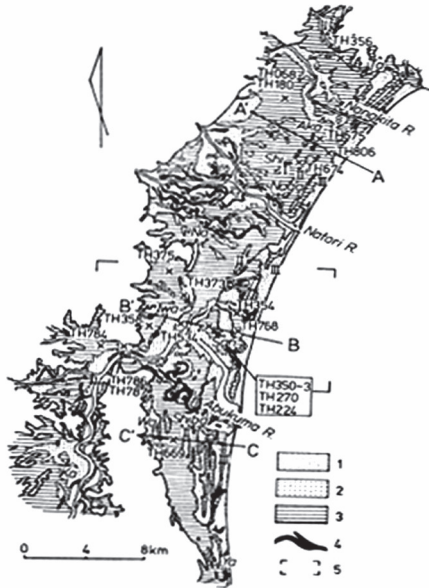
3000年前（縄文時代晩期）

1800年前頃（弥生時代V期～VI期～古墳時代創期）を中心とする時期である。

尚、「海水準の低下した時期」と「海退期」とは近い関係にある。

例2 東北地方の海岸平野（仙台・八郎潟南部・石巻・田名部・青森）

図5は仙台平野の調査例である（注11）。表1は東北地方の海岸平野の砂堆列の時期比定を示したものである。ここから、I（5000年～4500年前）・I'（3300年～3000年前）・II（2600年～1700年前）・III（800年前～現代）の4時期に、砂堆の形成が進んだことがわかる。尚、暦年は¹⁴C年代値だが、更正内容は不明である。



第1図 仙台平野における砂堆列の分布
 1. 浜堤列 2. 自然堤列 3. 後背堤地 4. 江成跡 5. 第2段の堤列 ×: 年代試料採取地点 Ta: 多賀城 Aka: 赤川 Shi: 下郷町 Naga: 長瀬町 Na: 名取 Iwa: 岩沼 Non: 三野新屋 Wa: 瓦理 Shiba: 柴野 Ka: 角田 Ya: 山下
 I: 第1期堤列 II: 第2期堤列 III: 第3期堤列

図5 仙台平野の砂堆列

表1 各調査地点の年代

	×10 ³ BP				
	5	4	3	2	1
Sendai north	I 4,300		2,500	II	730 III
center	I 4,500	3,100	3,000 2,800	II 1,600	1,000 III
south			2,800	II	
South of Hachirō-gata	I 4,500	3,500	I'	2,300 II 1,500	800 III
Ishinomaki		I 3,400	I' 3,000	2,200 II 1,500	
Tanabu	I 4,500			2,200 II	600 III
Aomori	5,000 I		2,500	II	



図6 東京湾南東岸の砂堆列

例3 東京湾南東岸（館山低地）に見られる砂堆列

図6は館山低地の調査例で（注12）、古くには I（7500年～6500年前）・II（6500年～4800年前）・III（4800年～3800年前）の3時期に砂堆の発達が見られる。加えて、IV・V・VIは近世から近代における地震（元禄地震：元禄16年（1703年）・関東地震：大正12年（1923年）の隆起によって成立が促された砂堆である。尚、年代は暦年更正を行った¹⁴C年代値（calBP）である。

例4 太平洋岸（九十九里浜）の砂堆列

図7は九十九里浜の砂堆列（北半分）を図示したものである（注13）。3本の砂堆列の形成年代は、I（5500年～4000年前）・II（4000年～2000年前）・III（1500年前～）と考えられている。



図7 九十九里浜の砂堆列（北半分を図示）

以上、簡単に幾つかの外洋沿岸に形成された浜堤列資料を見てみた。各地の砂堆列の形成時期にばらつきがみられ、一様ではないことがわかる。詳細は不明だが、¹⁴C測定時の更正内容の違い、地殻勾配、長期地殻変動、地震による急激な隆起、沈降の影響等の地域特有の条件の違いが一因と考えられる。又、九十九里浜の例では、太平洋の大きな波が押し寄せる地域なので瀬戸内海とは多少環境が異なるが、遺跡調査の結果、人の砂堆への定住利用は定住にとって十分安全になった時期を選ぶため、「砂堆地形完成後定住するまでに千年以上」かかる場合があったことが示されている（注14）。汀線の十分な後退と後背湿地の離水等が条件になるのだろう。

5) 揖保川下流平野の地形環境

『姫路市史』第七卷上に記載された網干デルタの東側の砂堆列は3列（第1砂堆=内列砂堆、第2砂堆=中列砂堆、第3砂堆=外列砂堆）であって、高橋 学氏が指摘する第4砂堆の記述は無い（注15）。



図8 天満の砂堆列と発掘調査地点

堆ができあがっていたとする。このことから、砂堆形成時期は、それ以前の約1000年前（平安時代中頃）の「中世海進」に相当するのではないかと推定されている※4。

ところで、第2砂堆については、姫路市大津区天満辺作遺跡で発掘調査が行われており、縄文時代や弥生時代の土器や室町時代の遺構が確認されている。図8は「天満の砂堆列」と「姫路市大津区天満辺作遺跡の発掘調査地点」を示したもので、図中の「中列砂堆」に位置する「第2次調査地」が、辺作遺跡の主要調査地点である（注16）。図中右端の河川は汐入川である。出土遺物は、最も古いもので元住吉山Ⅰ式土器（縄文後期中葉・約3600～3500年前）まで遡る。

辺作遺跡から出土した遺物類は、現在のところ、砂堆に関して唯一の古代以前の時代比定が可能な資料であり貴重なものである。砂堆上に古代の遺構は残っておらず、遺物は砂堆から投棄されたと考えられる状態であったが、縄文時代晩期から弥生時代前・中・後期に至る遺物も出土しており、これらはこの時期に砂堆で活動した人々の痕跡である。

縄文期の海辺での人の活動として、貝類や海藻類の採集、漁撈、製塩などが思い浮かぶが、何故か西播磨地域には貝塚が発見されて居らず、辺作遺跡においても同様である。また、弥生時代後期末には吉備（岡山県南部、足守川流域一帯）の土で製作された特殊な壺がみられる。これは「搬入品」で「祭祀に使用」されたものとされるが、明らかに「墓」の存在を示唆するものである。これらのことから、第2砂堆が安定した陸地になった後も定住する居住域とするには不向きであったと推測する。あるいは、第3砂堆の形成に向けた砂が揖保川河口から沿岸流によって運ばれてきたため富栄養化せず、さほど食材豊かな海浜ではなかったことを示しているのかもしれない。おそらく潮干狩りができるような遠浅の砂浜ではなかったのだろう。

また、第3砂堆の南側には「未完の第4砂堆」とでもいべき砂地がちの部分がある。この「未完の第4砂堆」と第3砂堆の間隔（約500m）は、第1砂堆—第2砂堆間と第2砂堆—第3砂堆間の間隔

(約300m) よりも広い。これは第3砂堆形成後、海退と地盤隆起が同時に生じたことによって汀線が大きく後退したことによると推定する。地盤隆起は長期にわたって徐々に傾動が進むもので、貞観10年(868年)に発生した貞観播磨地震(山崎断層による播磨地震)の前兆現象であったのかもしれない。第3砂堆と未完の第4砂堆の間隔は東に行くほど広がる傾向がある。これは東方が西方に比べて大きく隆起する東西方向の不均等な地盤隆起に起因するのだろう。この頃列島周辺で生じた一連の大きな地殻変動と連動した地盤の東方隆起による揖保川西遷が始まったことと関連する。また、このような揖保川西遷によって、大津茂川以東に形成されつつあった砂地への土砂の供給が停止したため、明確な第4砂堆の形成には至らなかったであろう。

(※4) 第3砂堆について、『姫路市史』第七巻下 資料編 考古pp.46-52「辺作遺跡」の遺跡説明文の中で、その形成時期を室町時代中頃としている。しかし、前述のように『姫路市史』第七巻上 資料編 自然に従えば、室町期には既に砂堆が出来上がっており、「自然編」で年代測定された室町期の貝殻はその時代の人々が食べて捨てた生活痕を示すものである。(注14)でみたように、砂堆形成と砂堆上での居住域の形成にはかなり時期差が生じるものなので、『姫路市史』第七巻下 資料編 考古の室町時代中頃という年代記述は誤りだろう。

さて、先に「辺作遺跡」と周辺の砂堆列についての記述をみたが、次に、より広域の揖保川流域の地形について概観した資料をみてみよう。

図9は高橋 学氏の(注9)の添付図「揖保川下流平野の地形環境Ⅱ」の砂堆部分を分かりやすくするために加筆して引用したものである。本論文は完新世段丘の成立過程と条里制を始めとする古代遺跡との関連を探ったもので、直接「砂堆」に関連したものではない。しかし、本項を進めるにあたり示唆に富むと考えられるので、多少長くなるが以下に本項と関連する箇所を引用する。尚()内は引用者の注記である。

「(地形分析) … (中略) … 縄文海進時には、揖保川沿いでは姫路市余部付近まで、大津茂川に沿っては姫路市田井付近まで海域となった。また、海進の影響を受けて、京見山の南麓から姫路市宮田、同市坂出付近まで低湿化した(図20参照)。

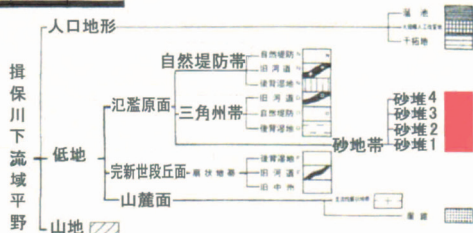
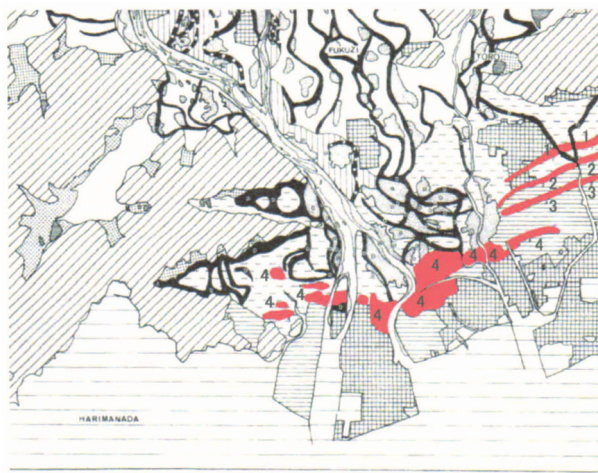


図9 揖保川下流平野の地形環境

… (中略) … (完新世段丘と遺跡群) 六甲変動と呼ばれる地盤運動の影響により播磨平野の東部ほど隆起傾向にあるために、更新統(更新世の地層)が地面に表れやすく、西部では沖積平野の下に埋没しやすい。… (中略) … 丘陵や段丘に代わって、現地表面の広い面積を占めるのが完新世段丘面である。… (中略) … (太子町～たつの市にかけて分布する縄文遺跡～弥生遺跡) 川島遺跡、立岡遺跡、福田天神遺跡、片吹遺跡、… (中略) … 福田片岡遺跡、平方遺跡など、平野部で発見されるほとんどが完新世段丘面上に位置している。

これは、段丘化に伴って河川の氾濫による土砂の供給が停止しているため、遺構面の埋没深度が浅く、現地表面に遺物が散布しやすい

い状態にあり、遺跡として認定される可能性が高い※5…（中略）…。この、段丘化の時期に関しては、従来、縄文時代末から弥生時代初頭のいわゆる弥生海退期にあたと考えられていたが、…（中略）…揖保川下流平野の場合、古墳時代末以降中世初頭までの間と考えた方が良さそうである。しかし、前者に属するものも全国各地で見出されており、それを完新世段丘Ⅰ（弥生段丘）とし、後者を完新世段丘Ⅱ（古代段丘）とすべきかもしれない。…（以下略）…」

図中、砂堆部西側で東に向いた黒の太線は旧河川路を示す。また、赤く示したように砂堆は4列を数える。このうち第4砂堆の東部が「未完の第4砂堆」に概ね合致すると考える。

（※5）文脈の趣旨は遺跡埋没深度の浅さの理由説明にある。しかし、事例に上げられた遺跡の多くは、中溝康則氏によると、表層散布状態ではなく試掘調査によって見出されているとのことである。

6) 網干デルタの砂堆列

網干デルタの復元や形成過程について検討したものが図10・図11・図20である。網干デルタとその周辺の砂堆列の特徴は次のようなものだろう。まず内海に面していること。次に網干デルタの東側に位置する第1～第3砂堆は並列に形成されていること。さらに、第4砂堆は大津茂川以東（網干デルタの東側）の並列部と以西（網干デルタ）の揖保川河口を取巻くように円弧状に分散・点在する地域に分かれており、第4砂堆の形成は一方向の海退だけでは説明できない、より複雑な様相を示していることである。

氷河期に東西に分かれていた瀬戸内海が温暖化による海進によって連結するのが9000年前～8000年前（縄文早期中葉）とされ、上昇して来た海水準変動が遅くなるのが8000年～7000年前とされるので、縄文早期末は瀬戸内海成立直後か海面上昇最高点への変局期に相当する（注17）。従って、現在見られるこれらの砂堆はこの時期以降に形成されたものである。

第1～第3砂堆が形成された時期の推定河口を、図20に青く着色して示した。この推定河口から大津茂川にかけての砂堆は乱れているが、それより東側の砂堆列は縄文海進最盛時の汀線に並行するように東西に長くのびている。砂堆間隔は約300mである。第1～第3砂堆は推定河口から搬出された土砂が、沿岸流によって東北東に向かって運ばれ堆積したものと考えられる。この方向は、図20の推定河口からさらにのびている旧河川を反映して図10-1に示した「推定河川流」の流出方向と矛盾しない。

ところで、第1～第3砂堆の形成と連動する長期に渉る河道延長に関わらず、推定河川流は常に推定河口付近で大きく曲がって東北東に流出しているようである。また、揖保川西側の「御津低地」には明確な第3砂堆以前の痕跡は見られない。従って、揖保川が御津低地に流れ込まず、大きく方向を変える規制が存在したとみるべきである。それは、図20の推定河口のすぐ西側に位置する「自然堤防」で、現在の姫路市余部区上余部付近と姫路市網干区垣内西町付近の2ヶ所に相当する地域である。ここには土砂堆積だけでなく河口流を東北東方向に規制し続けるような「地盤構造」が地下に埋もれていると推定する（図10-1では「流路を規制した微高地」と表示している）。

現在の揖保川を挟んだ西側にある筒状の平面構成をなす山塊が、赤穂（伊勢）累層・流紋岩質溶結凝灰岩や天下台山流紋岩で構成されている（注18）ことを考慮すれば、同様の組成をもつ岩盤が微高地を形成していたのかもしれない。

尚、大津茂川左岸には、第3砂堆に属する砂堆が大津茂川の流れによって南に押し出されたよ



図10 砂堆形成の機構推定 2020.04 作成 石黒 始
※図中の数字は表2に対応する。

うに見える箇所がある。そして、その南側、大津茂川の両岸（姫路市網干区大江島と姫路市大津区吉美付近に相当する地域）には、「未完の第4砂堆」から続く砂堆が存在する。さらに、それより西側は、現在の揖保川河口部を囲むように円弧状に何か所も分断された状態の砂堆が展開している。

この円弧状砂堆の形成は次のような経緯をたどったのではなかろうか。海退に伴って川筋は伸びて河口は南進し堆積が進行する。それと同時期に地殻の東方隆起に伴う傾動によって川筋の西遷（約1km）が生じ、従来河口流出方向を東北東に規制していた二つの微高地の間をぬって流路が西側に移動していく（図10-2）。その結果、揖保川河口流出方向が東から南へ移動するといった言わば河口流出方向の首振りに伴い、河口の南に円弧状砂堆の形成が進行した。ただし、未完の第4砂堆の西端（現在の大江島・吉美）については完全に砂の供給が停止したわけではなかったもので、明確な第4砂堆の成立をみるに至ったのだろう。一方、円弧状砂堆の形成は揖保川河口流出方向の首振りを契機とするものなので、大江島の砂堆と並行して形成が進んだ時期があったとしても、その並行期間は短く、後発で遅れて成長した砂堆ということになる。

ところで、円弧状砂堆のうち、現在の揖保川河口の東側は、第1～第3砂堆や「未完の第4砂堆」と同様に縄文海進最盛時の汀線に並行するように砂堆が伸びているが、御津低地側の砂堆は、切れ切れに点在していて様相が異なる。これについては、前者が揖保川からの土砂の供給と沿岸流や波力の影響といった、第1～第3砂堆に似た状況下で砂堆の形成が進んだのに対して、後者は周辺の山塊（権現山・稲富山等）からの小河川や岬状に突き出した基山・武山の北側に回り込んで渦を巻くような複雑な海流の影響が想定されよう。このように、単なる海退起因とは異なる生成要素や時期差を踏まえて、第4砂堆とは区別して円弧状砂堆を「第5砂堆」と呼ぶことを提唱したい。

尚、河口流出方向の首振り後、即ち揖保川西遷途上の揖保川の流路は、現在の揖保川河口東側にある「興浜・新在家（姫路市網干区興浜・新在家）」の砂堆と接する辺りで西に湾曲している。また、この砂堆の北側を沿うように現網干川（或いは新在家川）が東流している。おそらく、先述した

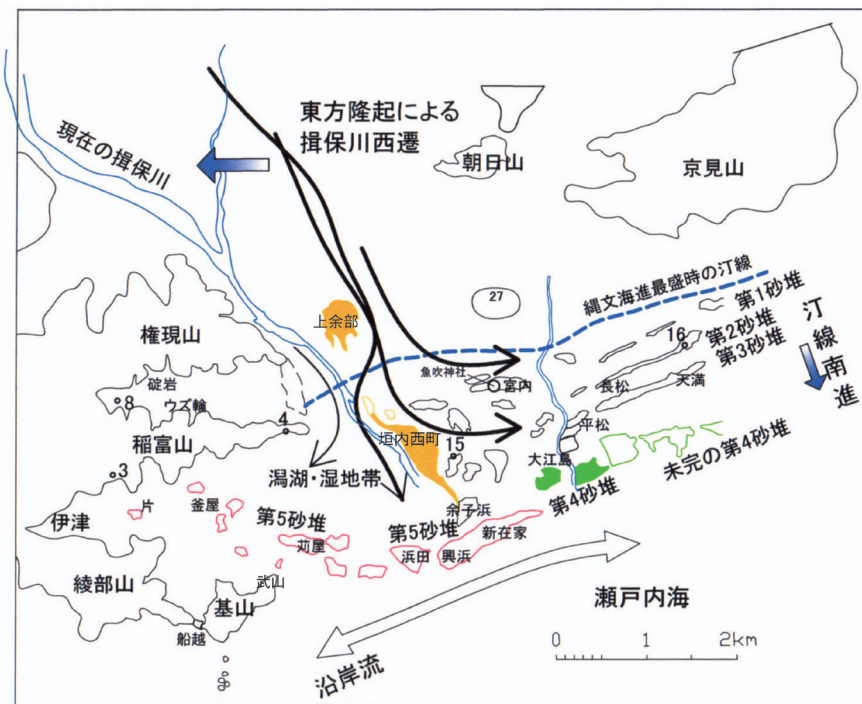


図11 第5砂堆を考慮した砂堆配列 2020.04 作成 石黒 始
※図中の数字は表2に対応する。

「流路を規制した微高地」に似た地盤構造がこの範囲に存在していて、南流しようとする揖保川本流の向きを西に変えたり、東へ分流させたりしたと想定する※6。つまり、この「流路を規制した微高地」が第4・第5砂堆の素材である搬送物を東西に振り分けたのである（図10-2）。尚、図11は第5砂堆を考慮した砂堆配列を示した図である。

（※6）『御津町史』第一巻の柱状図では明確ではない。

7) 文献に示された地名と景観変化

前項で文献に示されていない時期の砂堆形成を巡る沿岸景観の変化について考察を加えたが、本項では文献に現れた地名を参考に、古代から中近世に至る環境変化を簡単に追ってみたい。

図12には、『角川日本地名大辞典』28 兵庫を参考にしつつ(注19)、史料にみられる網干デルタやその周辺部の主な地名とその初出時期、景観に大きな影響を与えたと考えられる巨大地震、及び景観変化を考えるに当たって貴重な資料を提供する古網干遺跡(姫路市網干区垣内南町)の出現・存続期間を時系列に従って示した。

8世紀に成立した『風土記』以降では、12世紀中頃から後半にかけて文献に現れる大江島(嶋)荘や播磨国網干渡(注20)の記述が最初であろう。仁平元年(1151年)と推定される「平信範書状案」に「坂越・大江嶋荘」と見えるということで、「大江嶋荘」は現在の姫路市網干区大江島に

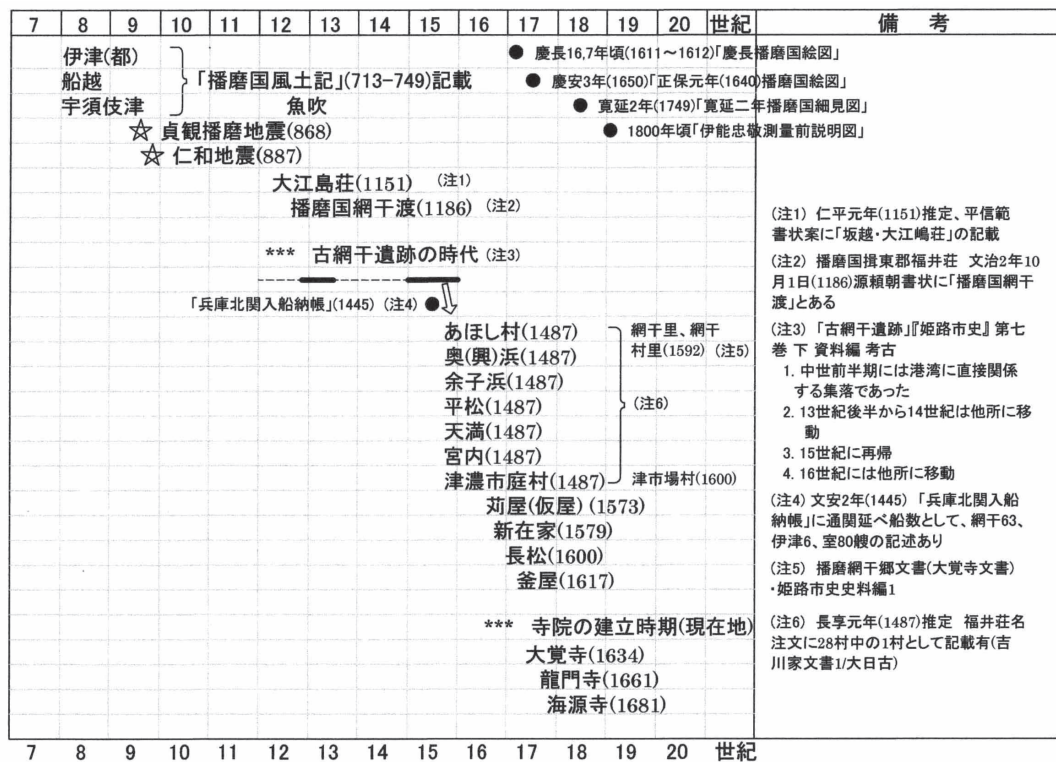


図12 文献に示された網干デルタの地名

成立していた荘園と考えられている(注21)。また、古網干遺跡は、12世紀初頭から15世紀末まで断続的に継続した集落遺跡で、大江島荘や播磨国網干渡とも時期が重なる。『姫路市史』第七卷(注22)には、「古網干遺跡は魚吹八幡宮がある砂堆と近世の網干のある砂堆に挟まれ、かつ揖保川に近接した位置にある…(中略)…「川海」に面した集落であった」と記されている。具体的には、古網干遺跡は第3砂堆列に属する砂地地域と旧揖保川河口部西側の「自然堤防」をまたぐ位置に存在する遺跡(図20 図中遺跡番号15)で、大量の貿易陶磁器などの出土品から「平安時代後期から鎌倉時代前期には揖保川河口付近に位置する港湾集落」であったと考えられている。古網干遺跡が成立する時期、揖保川は西遷途上であり、古網干遺跡が面していた景観は南に位置する第4砂堆に囲まれた潟湖、あるいは湿地帯であったと考えられる(図20)。また、周辺に点在する砂堆上にも港湾機能が分散していただろう。

ところで、12世紀中頃には「大江島荘」が成立していることから、第4砂堆は離水が進み陸化

していたことが考えられる。揖保川本流は既に「自然堤防」の西側に移っていて、古網干遺跡は、西遷途上の揖保川本流から取り残された支流及び陸化しきれていない湿地帯に面していたとも考えられる。いずれにせよ、海上輸送を担う大形船は沖合に停泊し、荷物を積んだ小形の平底船で支流を往復したり、さらに上流に向かって揖保川流域を上下する川舟との中継地の機能を果たしたりするような、港の機能を持った集落だったのである。

15世紀になると、文安2年（1445年）の『兵庫北関入船納帳』に「網干」の名が見え、塩や鯛を積んだ船が一年間に63隻も北関に入港しているように、「網干」の港は大いに栄えている（注23）。

ところで、長享元年（1487年）の「福井荘園注文」には福井荘に含まれる28村中として「あほし（あほし：網干）村」、「横浜村」、「興浜村」といった集落名が見える（注24）。ここで注目したいのは、現在、「余子浜」・「興浜」の地名を冠する集落が位置しているのは、「網干村」の遺称地と考えられる古網干遺跡よりも南側の砂堆上で、「興浜」は明らかに第5砂堆上である。ここから15世紀末には、これらの集落への人の移住も想定される。古網干遺跡から出土した遺物には16世紀に下るものは極端に少ないので、おそらく揖保川支流と古網干の南東面に存在した湿地帯は陸化が進み、古網干は次第に港湾機能を失って行ったのだろう。

16世紀後半については次のような文献が残されている。

天正4年（1576年）小寺（黒田）官兵衛の働きかけによる、「播州網干」村を攻撃しないようにという「織田信長の禁制」（注25）

天正5年（1577年） 「網干郷」に秀吉の禁制が出される（注26）。

天正7年（1579年） 「播磨国揖東郡新在家村藤衛門等屋敷売券」に、「新在家村」の名が認められる（注27）。

天正8年（1580年） 羽柴秀吉から「網干地下中」にあてた戦争協力要請の書状（注28）。

慶長5年（1600年） 「播州網干三ヶ村」に徳川家康の禁制が出される（注29）。この「網干三ヶ村」については、「福井荘園注文」にみられる「網干村」「横浜（余子浜）村」「興浜村」ではなく、「興浜村」「新在家村」「余子浜村」3村を指すと考えられる（注30）。

尚、信長・秀吉・家康の「禁制」を保管している大覚寺は興浜に所在しているが、天保12年（1841年）に書き写されたとされる「大覚寺由来書写」（注31）によると、弘治年間（1555～1558年）に現在地に移ったと記されている。このように、16世紀後半には第5砂堆は集落や寺院が設けられるに足だけの安定した場になっており、その上に成立した興浜村・新在家村やその北側の余子浜村が港の機能を引き継ぎ地域の中核となって発展していったと考えられる。

また、御津低地に点在する第5砂堆についても、天正元年（1573年）に「仮屋（苅屋）」と表記した資料が存在しており（注32）、万治元年（1658年）には丸亀藩の転封の際に竜野藩から「釜屋」の地を引き継いだ記録があるので（注33）、現在の揖保川河口の東側よりは幾分遅れたとしても、16世紀末～17世紀前半には集落が成立していたことが分かる。

従って、15世紀～16世紀に揖保川西遷が進んだ結果、既に形成されていた第5砂堆が陸化したことが分かるのである。そして、江戸期には幕府の要請に基づいて作成された国絵図をはじめとして各地域の地図・絵図が作られたことで、現在の地形や地名との比較が可能となっている。

8) 小結

この様に、網干デルタの形成過程について述べたが、節の最後に、改めて各砂堆の形成時期についてまとめたい。なお、以下の推定年代は「水月湖年縞」を基準とした海退期を目安とした。従って、当然海進時を目安とした場合や『姫路市史』とは推定年代にずれが生じている。

第1砂堆 縄文海進最盛期前の約7000年～6800年前（縄文早期末～前期）の時期に相当すると推定する。

第2砂堆 ここでは辺作遺跡が発見されていて、最も古い土器は3600年前～3500年頃の縄文時代後期中葉に遡る。但し、関東の例で人の砂堆への進出は、砂堆環境が生活環境として安定していることが前提となり、千年以上の差が生じる場合があることが分かっているので、当該砂堆の形成時期はさらに古く、5500年～5000年前（縄文時代前期～中期）に遡るのかもしれない。

第3砂堆 第4砂堆の形成時期は、水月湖で観察できる約3600年前の縄文時代晩期～1800年前の弥生時代の間のどこかと考えられる。『姫路市史』で年代測定された第3砂堆から出土した貝殻が室町時代と考えられているだけでなく、第3砂堆列に属する砂地地域と旧揖保川河口部西側の「自然堤防」には平安時代後期から鎌倉時代前半に遡る港湾集落である古網干遺跡が確認されていることから、遅くとも平安時代のある段階には完全に離水していて、集落が展開するほど安定していたことが推測できる。したがって、とくに、約2500年前頃を中心とした「弥生寒冷期」（注34）の海退時に形成が進んだのではないかと推定する。

第4砂堆 大津茂川の東側には「未完の第4砂堆」がある。ここについては、水月湖のデータでは明確に海退期とはされていないが、図4に示された約1200年前を最小値とする方解石減少時期以前に滞留と堆積が始まっていたのではないかと思える。しかし、第3砂堆南部に並行する現在の大江島を西限とする第4砂堆への砂供給は長期間続かなかった。これは、約1150年前、貞観10年（868年）に発生した山崎断層を起因とした貞観播磨地震や、仁和3年（887年）に発生した仁和地震（南海トラフ巨大地震）に伴う地盤隆起によって揖保川西遷が促され、流路の変更と砂の供給の断絶が生じたためと考えられる。

尚、現大津茂川右岸に接する「大江島」は第4砂堆上の地名であるが、仁平元年（1151年）までには「大江嶋荘」という名の荘園が成立していたと考えられている。これは地殻変動による隆起によって第4砂堆の離水が促された結果を示すものであろう。

第5砂堆 先述したように、第4砂堆に続くように現揖保川河口を取り囲むように円弧状に残されている第5砂堆は、9世紀後半以降に生じた地殻の東方隆起によって生じた揖保川西遷に伴う河口位置の移動が契機となって形成されたものであろう。図2の揖保川流路変遷図で11世紀以降の平野部の河道変遷が示されているが、上記のように9世紀以降に生じた地殻変動に伴うとする推定と矛盾しないだろう。こちらについては、「未完の第4砂堆」や大津茂川両岸の第4砂堆より後発ながらも9～10世紀頃以降に砂堆の形成が始まり、遅くとも1487年には砂堆上には、「興浜村」が成立するほど、安定した土地となっていたことが分かる。

(注1) 田中眞吾 2005「第三節 揖保川西遷で生じた歴史の襞」『揖保川町史』第一巻 揖保川町

(注2) 秋元吉郎 1969『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店 12刷（初刷は1958）pp.299-301

(注3) 国土交通省河川局 2007「流路の変遷」『揖保川水系の流域及び河川の概要（案）』

(注4) 兵庫県揖保川町 編 2001「揖保川西遷で生じた歴史の襞」『揖保川風土記』 後援・国土交通省近

- 畿整備局姫路工事事務所 同様の図が、田中眞吾・福島好和 2005『揖保川町史』第一巻 揖保川町に「図29 揖保川流路西遷図」として収められている。
- (注5) (注4)の田中・福島 2005と同一文献
- (注6) (注3)と同一文献
- (注7) 田中眞吾 2005「第二節 揖保川の西遷 1 八世紀以前の揖保川と林田川の流路」『揖保川町史』第一巻 揖保川町
- (注8) 田中眞吾 2001「第4節 御津町とその周辺の地形」『御津町史』第一巻 御津町
- (注9) 高橋 学 1990「播磨灘沿岸平野の地形環境と土地開発」『今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会
- (注10) 福沢仁之 1995「天然の『時計』・『環境変動検出計』としての湖沼の年縞堆積物」『第四紀研究』34(3) pp.135-149 日本第四紀学会
- (注11) 松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論』57(Ser.A) - 10 pp.720-738 日本地理学会
- (注12) 松原彰子 2012「東京湾沿岸に発達する浜堤列平野：館山低地と小櫃下流低地を例にして」『慶應義塾大学日吉紀要.社会科学』No.23,pp.1-14 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
- (注13) 松原彰子 2013「九十九里浜平野と遺跡分布」『慶應義塾大学日吉紀要.社会科学』No.24,pp.21-28 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
- (注14) (注13)と同一文献
- (注15) 成瀬敏郎 1998「海岸地形」『姫路市史』第七巻上 資料編 自然 姫路市
- (注16) 秋枝 芳 2010「辺作遺跡」『姫路市史』第七巻下 資料編 考古 姫路市
- (注17) 近藤義郎・河本清編 1987『吉備の考古学』pp.127-129 株式会社 福武書店。杉山一雄 2019『平原から海へー瀬戸内海の形成』岡山県古代吉備文化財センター
<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/636874.html>他
- (注18) 後藤博弥 1978「龍野市付近の地質構成」『龍野市史』第一巻 第1章第2節 p.10 龍野市。田中眞吾 2001「御津町とその周辺の地形」『御津町史』第一巻 第一章 第四節 pp.33-76 御津町
- (注19) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1988『角川日本地名大辞典』28兵庫 株式会社角川書店
- (注20) 文治二年十月一日 源頼朝書状 黒川本賀茂注進雑記 『鎌倉遺文』182号。加茂別雷神社 1940「第八 神領 網干庄」『賀茂注進雑記』 国立国会図書館デジタルコレクション
- (注21) 仁平元年 京都大学所蔵兵範記裏文書 『平安遺文』4735号。陽明文庫所蔵行親紀卷裏文書 『平安遺文』4743号
- (注22) 中川 猛 2010「古網干遺跡」『姫路市史』第七巻下 資料編 考古 姫路市。白谷朋世 2005「播磨国揖保郡の港についての一試論－五泊と朝臣オノ木遺跡の検討－」『待兼山考古学論集－都出比呂氏先生退任記念－』大阪大学考古学友の会
- (注23) 研究代表者 藤田祐嗣 編 2002『中世瀬戸内水運からみた地域構造の歴史地理学的研究－兵庫北関入船納帳の分析－』<平成10年度～平成13年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書>
- (注24) 長享元年 播磨福井荘村名注文 『大日本古文書 家わけ文書』第九巻 吉川家文書之一 三〇六号 姫路市史編集委員会 編 1974『姫路市史』資料編1 姫路市役所
- (注25) 天正四年正月 織田信長禁制(播磨網干郷文書) 姫路市史編集委員会 編 1974『姫路市史』資料編1 姫路市役所
- (注26) 天正五年一二月六日 羽柴秀吉禁制(播磨網干郷文書) 姫路市史編集委員会 編 1974『姫路市史』資料編1 姫路市役所
- (注27) 天正七年四月二〇日 播磨国揖保郡新在家村藤衛門等屋敷売券 兵庫県立歴史博物館 編 2019『お城ができる前の姫路 特別展図録』
- (注28) 天正八年三月二九日 羽柴秀吉書状(播磨網干郷文書) 姫路市史編集委員会 編 1974『姫路市史』資料編1 姫路市役所 尚、『網干町史』では、羽柴秀吉徴用状 とある。
- (注29) 慶長五年九月二五日 徳川家康禁制(播磨網干郷文書) 姫路市史編集委員会 編 1974『姫路市史』資料編1 姫路市役所
- (注30) 川島右次・橋本植重 1951『網干町史』(1987復刻 中島書店)
- (注31) 大覚寺蔵 天保一二年一二月 大覚寺由来書写 兵庫県立歴史博物館 編 2019『お城ができる前の姫路 特別展図録』
- (注32) 永崎研宣「播州英城日記」『播州飭万郡英賀岩繫城主河野家記』<古典籍データセット(第0.1版)> 一般財団法人 人文情報学研究所
- (注33) (注19)と同一文献
- (注34) (注34) 篠田謙一・山田康弘・藤尾慎一郎 2018「平均気温10度の変化がもたらした影響」『日本人の起源』洋泉社。増田富士雄 編著 2019『ダイナミック地層学－大阪平野・神戸 六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析－』近未来社

第2節 近世・近代の地図資料（17～20世紀）から推定される河道と汀線及び道

近現代の干拓や埋立てによる汀線の後退距離や後退速度は自然現象によるものの比ではない。大きく変化した地形を反映した現在の地形図から、予備知識なしに中近世の汀線位置を見つけ出すことは困難である。

古代から中世にかけての網干デルタ近傍の地図資料は無いようだが、江戸期になると、現在の地図と対比できる絵図が現れる。絵図は近代的測量による地形図ほどの正確さに欠けることや記載内容の信憑性の吟味が必要ななどの課題があるが、前節で述べた地殻変動に伴う揖保川西遷期間の景観と現代の景観の間を埋める可視化された情報を持つ貴重な資料と言えるだろう。

尚、本節で比較検討資料として調査した近世以降の地図（絵図）資料を纏めると以下の様である。

- 1611～1612年（慶長十六～十七年）頃 「慶長播磨国絵図」（天理大学附属天理図書館所蔵）
1640～1650年 「瀬戸内海航路図（吊屏風）」（天理大学附属天理参考館所蔵）
1650年（慶安三年）「正保播磨国絵図」（たつの市新宮町 新宮八幡神社蔵）（注1）
1702年 「元禄播磨国絵図」「播磨国飾西・揖東・揖西絵図」
1749年刊行 「寛延二年播磨国細見図」（たつの市御津町善徳寺所蔵）
1800年頃 伊能忠敬測量前説明図 「自播磨国揖東郡大江嶋村至播磨国赤穂郡室津参考絵図」
1837年 「御領分郡境絵図」
1838年 「天保播磨国絵図」
1882～1916年頃 参謀本部陸地測量部が測量した地形図1/2万
1893年 「兵庫県揖東郡揖西郡全地図」1/2万（龍野市史第六巻 附図1）
1897～1907年 「龍野市とその周辺の地形図」1/2万（『龍野市史』第六巻 附図2）
1926～1927年 「龍野市とその周辺の地形図」1/2.5万（『龍野市史』第六巻 附図3）
1961年 「龍野市とその周辺の土地利用図」1961年調査（『龍野市史』第六巻 附図5）
1969年 「龍野市とその周辺の地形図」1/2.5万（『龍野市史』第六巻 附図4）
2008年発行 国土地理院地図 「網干」1/2.5万

1) 江戸初期の河道と汀線

揖保川河口部の記載がある国絵図は、「慶長播磨国絵図」「正保播磨国絵図」「元禄播磨国絵図」「天保播磨国絵図」などが知られており、その他に地方図、境界図等がある。本節では、現物の調査が可能であった「寛延二年播磨国細見図」（現在の分県地図に相当する絵図）を対象として検討してみる。尚、今回とった具体的検討方法は、絵図に描かれた地名、河道、行政界や道筋などの情報を、現在の地形図に記載された情報と対比するため、まず、絵図に記載された地名を現在の地形図と比較同定し地形図に記入する。その後確定させた地名との位置関係から河道や道筋の痕跡を現在の地形図に見いだすというものである。

図13は、兵庫県たつの市御津町善徳寺が所有する「寛延二年 播磨国細見図」（注2）から本章に関連する瀬戸内周辺（揖保川～市川）を切り取ったものである。図中、「完栗川」とあるのは「宍粟川」のことで、現在の「揖保川」や「中川・元川」を意味する。ただし、中州は表現されておらず、中川と元川は分流していない。また揖保川河口部の砂洲は現在ほど成長していない。ところで、中川と揖保川は現在とはほぼ同様の位置で分流しているが、現在は真砂一上川原付近で揖保



図13 寛延二年 播磨国細見図

川と合流する林田川は、それよりも数km南の現余子浜付近で揖保川と合流している様に描かれている。つまり、約270年前の1750年頃には林田川の西遷がまだ完了していなかったことを示しているように見える。

尚、図13 に示された網干デルタ地域の30カ所以上の地名の全てが現在の地名と符合し、位置関係も近似していることが分かったので、現在の地図に、図13に示された河川経路を、地名との位置関係と現在の地図に示された河川痕跡との照合から推定したものを 図14 に図示している。また、図14には後述する「吊屏風」にみられる地名や明治中期に作成された地図の汀線輪郭も併せて記入した。

ところで、慶安三年刊行の「正保播磨国絵図」（注3）の河口部は砂洲として示された浜田を挟んで2本の川筋で示され、夫々独立して瀬戸内海に流出している。また、元禄十五年「元禄播磨国絵図」や「播磨国飾西・揖東・揖西郡絵図」に示された揖保川河口部は元川・中川・揖保川に分れており、河川間の砂洲の発達も見られる。しかし現在とは砂洲の発達状態が異なり、元川と中川は河口部で合流せず独立して瀬戸内海に流出している。ところが、「寛延二年播磨国細見図」が示す揖保川河口部分は、年代の近い「元禄播磨国絵図」などとは異なり、「正保播磨国絵図」の揖保川や林田川とはほぼ同様の河道で描かれている。このことから、「寛延二年播磨国細見図」作成の背景となる地理情報は、刊行年よりも100年以上遡ったものと推定する。勿論、絵図の記載内容の評価は必須だが、今回は国土地理院の一般的な評価に従う（注4）。

また、本節で原図を図示出来ないが、天理大学附属天理参考館が所有する「吊屏風」（1640～1650年頃に作成された瀬戸内海航路図。航海中揺れる船の天井から吊るして使用する。）に、港名として「かり（刈）屋」「網干」「キビ（吉美）濱」「天満」の名が見られる。

尚、「かり屋」港の表記は余り見かけないものだが、揖保川西側を並流する現在の富嶋（飛鳥）川の河口付近に存在していたと考えられ、瀬戸内沿岸の基山・武山南端から約1km遡った現富嶋神社付近に比定できるだろう。江戸時代初期でも、揖保川河口流と隔てる砂洲が存在しており、揖保川河口流の影響を直接受けない穏やかな船泊りを形成していたと想像する。但し、言うまで



図14 江戸期～明治期の汀線と河川流路 (推定)

もないが、揖保川河口部の分流や砂洲の成長度合いは別途詳細な調査検討が必要である。

2) 江戸時代後期の河道と汀線

さて、次に「寛延二年播磨国細見図」が作成されてから約50年後に作られた、現在の景観により近い地図(絵図)資料を見てみよう。それは、1800～1816年に実施された伊能忠敬による測量時に、地元の「大庄屋」等によって作成され提出された現地説明図「自播磨国揖東郡大江嶋村至播磨国赤穂郡室津参考絵図」(以下、「伊能忠敬測量前説明図」と呼ぶ)(注5)である。図15は「伊能忠敬測量前網干地区説明図」全図で、図16はその網干中心部(興浜・新在家)を拡大した図である。

図16には地名として、濱田村、余子濱村、大江島村等も示されている。揖保川河口の砂洲はか



図15 伊能忠敬測量前網干地区説明図

なり現在の形に近づいていて元川、中川、揖保川の3本の川筋（元川と中川は併せて「揖保枝川」と書かれている）に加えて、網干川や湾洞川と見られる河道が図示されている。

また寺社仏閣として奥（興）濱村の林松寺や浄念寺、大覚寺（図に寺院の表現はあるが文字が消えている）等、現在も場所を同定できるものがみえる（林松寺は揖保川の改修に伴い平成年間に寺地を移動している）。

さらに幕藩体制を示す龍野御陣屋、篠山十兵衛殿御代官所、丸亀御陣屋や御高札が配置され、新在家村の南側には港湾設備がみられる。つまり、19世紀初頭には、現在の興浜—新在家が属している砂堆（第5砂堆）が安定した陸地南限となっていたことを示している。また、新在家村の南側には2区画の塩田が広がっている。此の塩田は昭和35年（1960年）頃まで稼働しており、その輪郭は現代の地図にも明確に残されている。

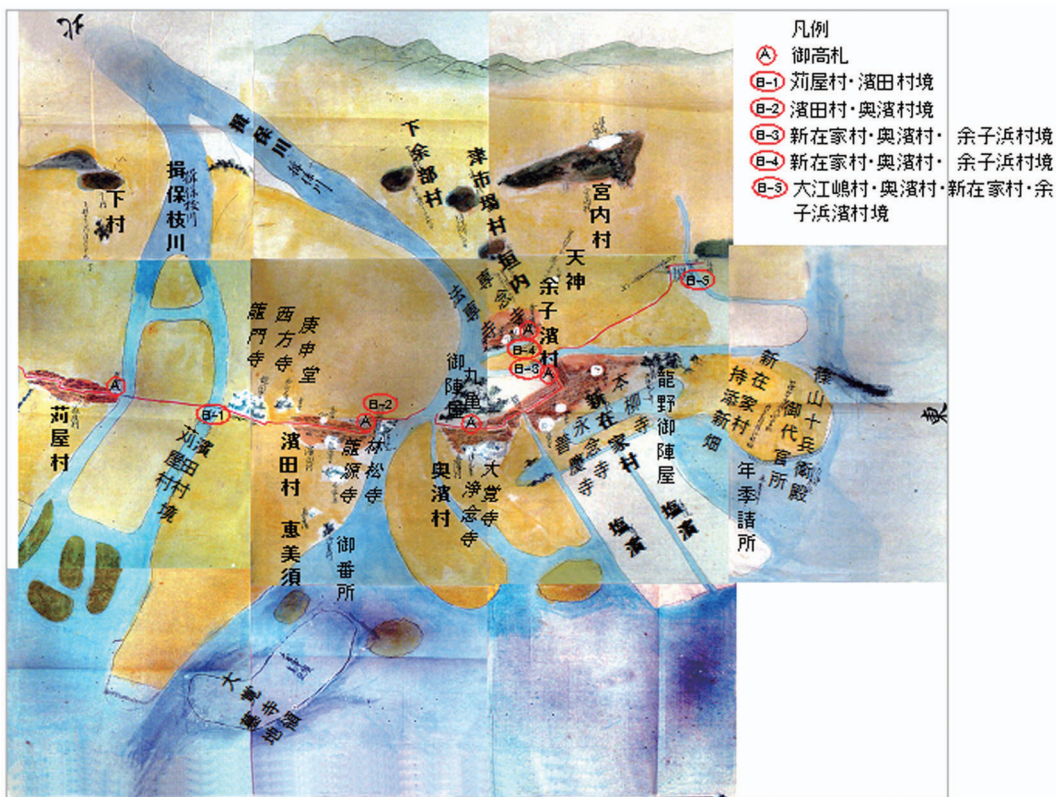


図16 伊能忠敬測量前網干地区説明図 興浜（奥濱）・新在家拡大図

3) 近世～近代の道と汀線

ここで改めて、中・近世～明治中期の網干デルタを通過する街道と川筋をみてみたい（図17）。この図に黒破線で示したものが、「寛延二年播磨国細見図」が示す街道、赤破線で示したものが、「伊能忠敬測量前説明図」が示す街道、赤実線は参謀本部陸地測量部が測量した地形図（図18参照）を参考にした渡河地点とその前後の道である。また、「青線」は明治中頃の川筋、汀線を示す。黒破線で示した街道筋は伊津—稲富—山田—下村—ヨコ山—中川—ハマダ（砂洲）—揖保川—横ハマ—宮内—西土井を經由するように示されている（太字・下線部は河川名）。「ハマダ」については現在の浜田の中心部を經由せず、砂州の北側をかすめるようにして約1km上流側を經由していることは注目すべきだろう。この時点ではまだ第4砂堆—第5砂堆に十分な安全性が無かったか、あるいは、「寛延二年播磨国細見図」の基になった地理情報が18世紀中頃ではなく17世紀かそれ

以前に遡る可能性があることを示唆する。

一方、赤破線で示した伊津以東の街道筋添いの村名は、以下の様である。

伊津—片—加家—釜屋—苅屋—揖保枝川（中川・元川）—濱田—揖保川—奥（興）濱—新在家—大江島—平松—天満…。伊津～大江島間は第5砂堆と第4砂堆を経由するが、平松—天満以東は北上し第3砂堆を通過する。

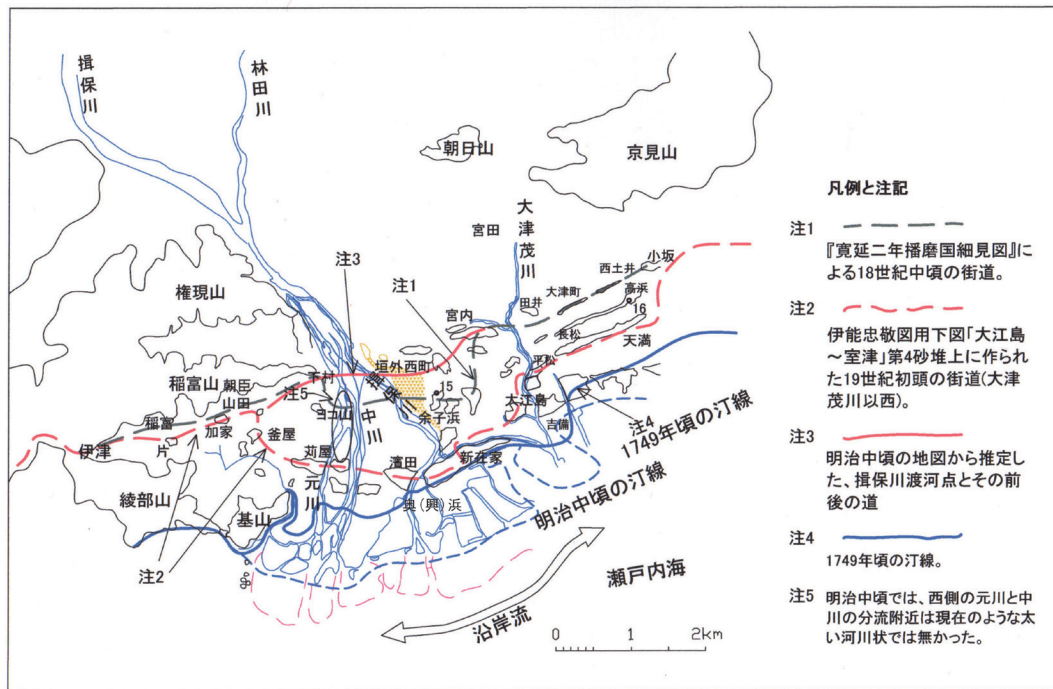


図17 中・近世～明治中期の網干デルタ景観

これより100年後の参謀本部陸地測量部作成地形図（図18）にもほぼ同様の道が示されており、

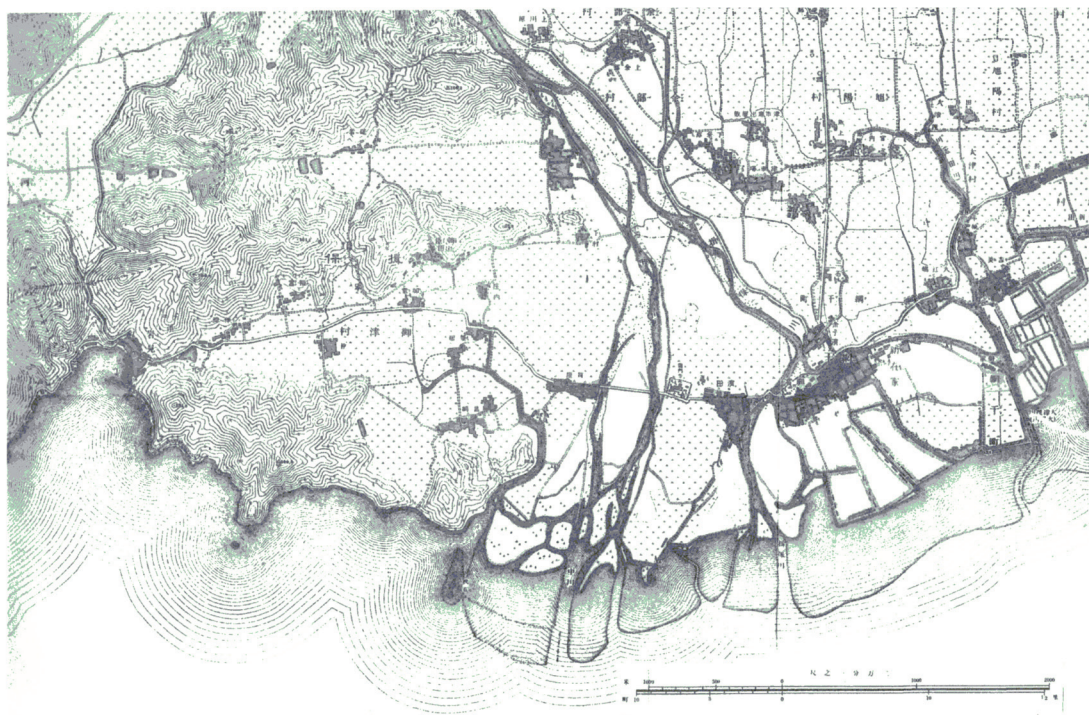


図18 明治中頃の網干周辺の地形図

西から、片—加家—釜屋—苅屋—元川—（砂洲）—中川—（龍門寺）—濱田—揖保川—興浜—新在家—大江島を通る街道である。加えて赤実線で示したように、下村から中川、揖保川を渡河し東方に向かって津市場あるいは下余部—宮内に至る「道」が記されている。「余子浜」を経由せず、第5砂堆や第4砂堆を通らない、より北側を通る東西経路があったことを示している。この道については、18世紀中頃以前の「街道」の痕跡と考えて良いのではないか。黒破線で示した経路との関連も考えられる。

さて、天津茂川以東の経路は先述したように、…大江島—平松—長松—天満…と第4砂堆から北上して第3砂堆の経路を通過する。「未完の第4砂堆」以南の地形が、勘兵衛新田（弘化元年（1844年）頃大堤完成）や新鶴場新田などの大規模な新田開発（注6）が進むまでは遠浅の海浜であったことがその理由であろう。京見山南部は所謂「網干デルタ」とは異なった景観を呈しており、第1砂堆～第3砂堆地域について12世紀～17世紀にかけて行われた開発の経緯を図10-2に示した（注7）。

最後に網干デルタの砂州・汀線・河道をみておきたい。図18に示した明治中頃の網干周辺の地形図（参謀本部陸地測量部が測量した地形図）では、新在家南部の砂洲がかなり南に伸びているように見える。この図を反映して図17に示した明治中頃の汀線と「寛延二年播磨国細見図」に基づく汀線を見比べると、汀線が数100mほど南に下がっていて、短時間に汀線が移動したことが見て取れる。

まず縄文時代に形成され、砂堆形状が明瞭で比較的均等な間隔を持つ第1砂堆～第3砂堆間の距離は約600mであり、推定した形成期間は約7000年前～2500年前の4500年間である。前提として滞留期間を無視し、平均値として0.13m/年の汀線後退速度を得る。

第3砂堆～第4砂堆間の距離は約500mであり、推定した形成期間は約2500年前～1000年前（貞観播磨地震より前と仮定）の約1500年間である。0.33m/年の汀線後退速度を得る。同一地域ではないので単純比較できないが、次に近現代について、「寛延二年」図の推定汀線を基準にして、図18及び現代の地理院地図（2008年発行）を参照し、汀線後退速度を南進の著しい「浜田」地域を対象にして試算してみた（図14参照）。

1749年～1900年（明治中頃）汀線南進距離約800m、汀線後退速度 約5.3m/年

1900年～2008年 汀線南進距離約1100m（埋立地南端まで）、汀線後退速度 約10.2m/年

1749年～2008年の259年間の平均値として7.3m/年を得る。縄文時代に比べて江戸時代以降の汀線後退速度が桁違いに速くなっていることが分かる。自然現象として上流側山間部の浸食による開析進行に伴う土砂供給量の増加や人工的な埋め立てが主な要因である。地形図から明治時代以降は沖積作用に加えて人の埋め立てが汀線後退を加速させたことが分かる。

また、元川と中川は、元川の西岸と中川の東岸にある堤防の中に収まる姿で描かれており、中洲も形成されている。ただし、東側の中川は普通の河川表示となっているものの、西側の元川は水量豊かな河川ではなく、中川から分流する小河川のように見える。より詳細に観察すると、権現山の東裾付近で揖保川と分流した中川は、それよりさらに1.7kmほど下った位置（苅屋から北東約900mの位置）で砂洲の痕跡から元川との「分岐点」をもっているように見える。しかし元川はこの「分岐点」から南へ500mほどは水の無い涸川の状態で描かれている。その後伏流水であったかのように姿を現した元川は複数の砂洲を通過した後、河口部で中川と合流しはじめる。ちなみに、現在は、元川、中川、揖保川の3カ所に分れている河口は、川筋の成長に従って元川と中

川が南に伸びた砂洲を挟んで流下した後に合流し、中川と揖保川の2カ所になっている。もっとも、19世紀初頭に作られた「伊能忠敬測量前説明図」では、元川・中川ともに水量があるように描かれていて、様相は異なる。また、「寛延二年播磨国細見図」では、揖保川の西側に描かれている川は一本だけで、元川・中川の区別は見られない。

このように、幅広い河川敷内を流れる中川・元川は、河道や水量に多様な変化があったようで、明治中頃は揖保川との分水量が現在よりも少ないようにも見える。このことが原因で元川が涸川になることがあったとすれば、揖保川西遷中でも最も西に偏した段階の痕跡を示しているのではないかと考えられる。

(注1) 龍野市教育委員会 編 1991『特別展図録 描かれた龍野 —絵図の世界—』龍野市立歴史文化資料館

(注2) 善徳寺所蔵「寛延二年播磨国細見図」は木版刷りの絵図である。

(注3) (注1)と同一文献

(注4) 善徳寺所蔵の「寛延二年播磨国細見図」と同様のものが、国土地理院 古地図コレクションに見られ、国土地理院 地理空間情報部 情報サービス課 地理史料係 (<https://kochizu.gsi.go.jp/>) で公開されている。国土地理院の解説の一部を以下に引用する。「江戸時代の後期から末期、つまり19世紀前半から中頃にかけて国別の地図(現在の分県地図にあたる)が多数出版される。ただ、それらの先駆けともいえるべき図が18世紀においてみられる。刊行された国図の中で最も古い刊行年を記すものは宝永6年(1709)「河内国絵図」で、他の畿内諸国(大和、山城、和泉、摂津)やそれらの周辺である近江や播磨の国図が、18世紀において刊行を見る。その点では、この播磨国図は刊行国図の中では早い段階のものとして位置づけることができる。…(中略)…地図には村名はじめ多数の地名や道筋が記されるが、さらにそのまわりにはおびただしい文字情報を記している。それらは播磨国の沿革や郡名、神社仏閣、名所旧跡とそれにまつわる和歌、土産などが記されており、この一枚の地図に地誌情報を満載し、播磨国全体の地理と歴史を紹介している。…(以下略)」

(注5) ふるさとひょうご創生塾グループと同好会 2010『千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵絵図』後援 神戸新聞社

(注6) 吉田俊三 1974『夢前川流域史』自家版

(注7) 田村善太 編 1996『大津区をたずねて』<文化財見学シリーズ37> 姫路市教育委員会文化部文化課には、3本の砂堆を堤防として利用しながら福井荘の荘域拡大のために開拓を進めた経緯が「大津区砂堆図」に年代毎に記入されている。

第3節 まとめ

従来から縄文海退期に形成された複列の砂堆の存在は周知であった。しかし、砂堆が異なる自治体の行政界を跨いで位置していたこと、また古景観を復元しようとする研究課題としての問題意識が薄かったことなどから砂堆形成過程の全体像と所謂網干デルタの形成過程を捉えようとする研究は無かったと言える。そこで、縄文期に始まる砂堆形成の機構、文献に残された中世の地名とその変遷、近現代の絵図や地図の解説を通して、網干デルタの時代ごとの景観復元を模索してみた。

その結果、網干デルタの景観形成を主に支配してきた自然現象が、所謂「揖保川の西遷」に伴う河口流出部の西方への移動であったことを改めて確認することになった。つまり、9世紀後半に貞観播磨地震(山崎断層)や仁和地震(南海トラフ)を引き起こした日本列島周辺の地殻変動が網干地域の東方隆起を促し、所謂「揖保川の西遷」の一要因であったと推定するに至った。

第1砂堆(縄文前期)～第3砂堆(弥生前期)までは、ほぼ等間隔で直線状に形成されていることから、気候変化の周期性や地殻の安定さがあったと言える。第4砂堆の形成途上で9世紀後半の地殻変動が生じ、それまで東方であった揖保川流出方向が「揖保川の西遷」の開始と同時に南→南西へと移動する。その結果、第4砂堆→「第5砂堆」の形成につながる。更に「第5砂堆」北側の

後背湿地の土砂堆積進行に伴って陸化が進行し、同時に河道も南に延長していく。

『播磨国風土記』の描写する景観は、その編纂時期が8世紀中頃なので、9世紀後半に生じた巨大な地殻変動の前である。従って、第5砂堆の形成前であり、東方に流れていた揖保川の右岸、現在の釜屋、朝臣、苅屋、浜田地域は瀬戸内海に口を開いた水深の浅い内海状態であったと考えられる。

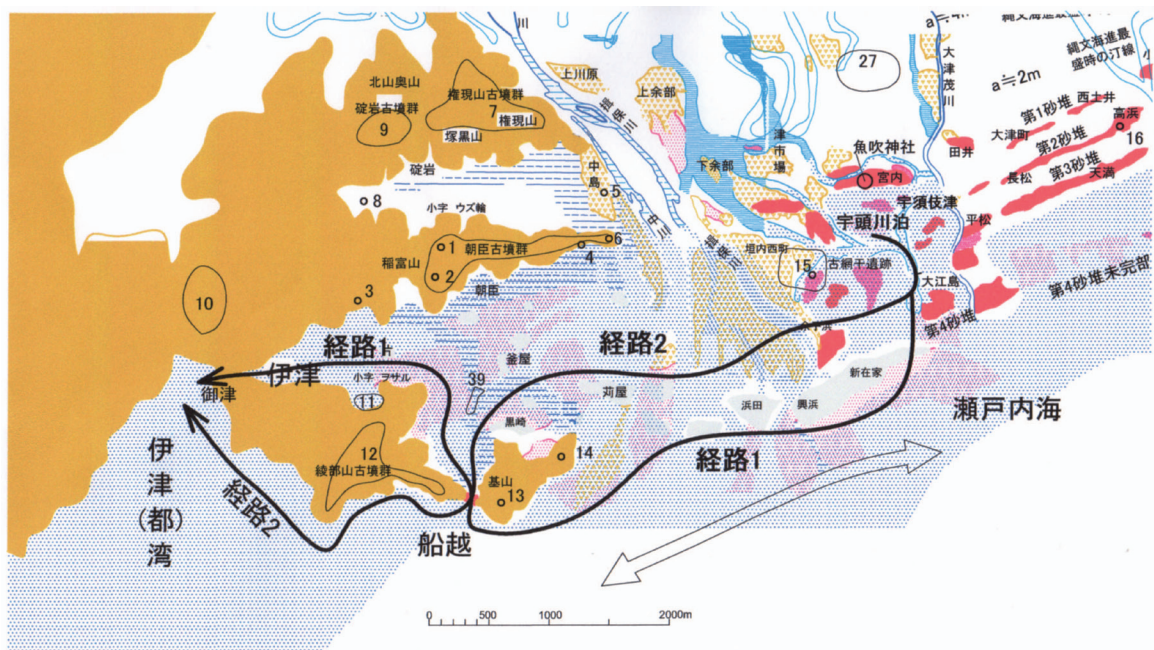


図19 神功皇后渡航経路の推定 経路1と経路2

4世紀頃の輿塚古墳や武山古墳は内海（現御津低地）の南に岬状に突き出した基山・武山尾根筋に造られており、武山古墳は内海入口に位置する。内海北側の朝臣山一帯に5世紀頃作られた古墳群も内海と瀬戸内海とを見下ろす位置である。つまり、本章冒頭に引用した『播磨国風土記』の神功皇后渡航説話に記された移動経路は、宇須伎津付近から内海状態の御津低地を湾西奥の現伊津に向かって進行したとも考えられるが、経路途上に「船越」地名が登場することで経路解釈は複雑化する。地元で言いならわされてきた船越の位置は現在の基山と綾部山に挟まれた幅100m足らずで標高約4m未満の小さな谷筋で、新舞子海水浴場への出入り口に当たる（注1）。船越を経由した場合に考え得る二通りの経路を経路1、経路2として図19に示した。経路2は宇須伎津から内海を通り、船越を経由して瀬戸内海に出た後に綾部山南側の海岸に沿って伊津湾に進む経路である。しかし、船を引くには伊津湾に至る海岸線は険しく危険で現実的ではない。経路1は宇須伎津から一旦瀬戸内海側へ出るが風向きのため航行困難なので途中陸路で船越を越えて内海へ出る。その後、綾部山北側の内海の穏やかな海岸線に沿って百姓たちに船を引かせて伊津に向かう経路である。筆者はこの経路1が『播磨国風土記』が描いた経路ではないかと考える。この場合、伊津から伊津湾（岩見港）に向かう小さな峠があるが、船を引いて船越を通過できたのであるから、この小峠も陸路通過できたであろう。また、『播磨国風土記』の「揖保の里」条に揖保川河口で天日槍と対峙したと書かれている葦原志挙乎は、その名を内海に生い茂った葦に由来し、この内海一帯を支配する人物であったと考えたいが如何だろうか。

何れにしても、第4砂堆—第5砂堆の形成過程は網干デルタの形成と景観の謎を解く鍵を持つも

のである。各砂堆形成の実年代や汀線位置変動、更に中近世以前の地図（絵図）のより詳細な調査については今後の研究進展に期待するところである。また、物流（海運や陸運）に関わる文献上の地名や遺跡調査も貴重な情報を与えてくれる。読者諸兄のご意見・ご教示を賜りたい。

尚、中溝康則氏から考古学的見地に基づいた多くの助言を、白谷朋世氏から文献史料の多くの助言を頂いた。また萬代和明氏から貴重な資料提供を頂いたことを付記する。

〔注1〕 ふるさとひょうご創生塾グループと同好会 2010『千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵』 伊能記念館所蔵絵図 後援神戸新聞社。黒崎地区自治会 編 2000『くろさきの歴史』黒崎地区自治会

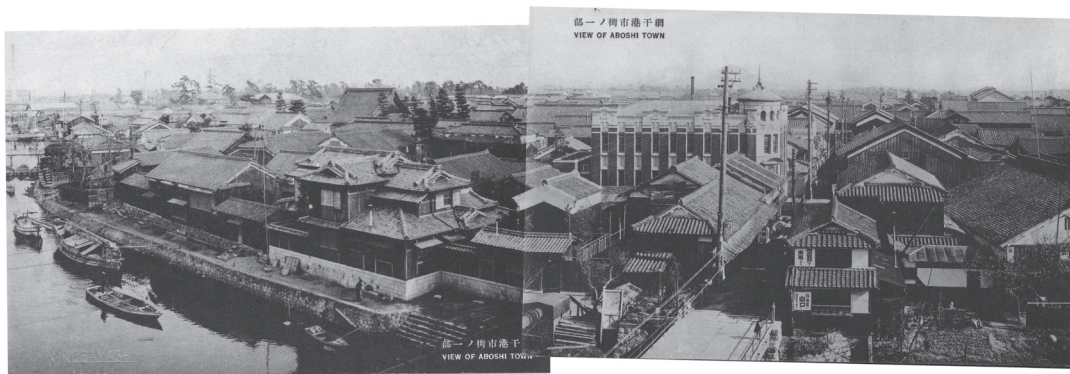
〔参考1〕 川嶋右次・藤本植重1951年『網干町史』（株）国書刊行会（1980年・復刻版） 本項では引用しなかったが、中近世の網干デルタの景観を伝える、港湾の盛衰、船舶、河川、塩業、藩政等の資料を掲載している。図15・16「伊能記念館所蔵絵図」に重なる記述が多くある。

〔参考2〕 近畿建設協会アーカイブ <http://www.kyokai-kinki.or.jp/topics/e-book/> 柳沢 忠 1980「大津茂川の流れ」、「加古川の流れ」、「揖保川の流れ」他国土交通省 近畿地方整備局 姫路河川国道事務所。図1の原図は「揖保川の流れ」に掲載されたものである。

〔参考3〕 「網干港市街」 昭和初期の網干港市街の絵葉書2葉を合成したもの。

北から南に向かって写したもので、手前左に見える河川は網干川。しっかりした護岸の船溜まりと、左奥に東雲橋が見て取れる。右下に見える橋は「網干橋」。中央右の頂部が葱坊主型のドームを持つ建物は旧網干銀行本店である。現在は姫路市の景観重要建築物に指定されている。撮影時期だが、右手前建物の壁面に「神戸銀行…」の看板が読み取れるが、網干銀行が神戸銀行に変わったのは昭和11年なので、この絵葉書はそれ以降に撮影されたことが分かる。また、英文で「VIEW OF ABOSHI TOWN」の説明書きがあることから、日中戦争開始後、昭和15年（1940）頃から盛んになった英語を「敵性語」として排斥するようになる以前であろう。つまり、昭和11年から昭和15年頃の間撮影されたことが推測される。

撮影は「小林写真館」で、「網干商工会発行」である。「網干港市街」は空襲を免れたため、今でも昭和10年代の景観を残している。（本資料は、白谷朋世氏提供による）



参考3 昭和初期の網干港市街写真

表2 遺跡表

1 朝臣4号・5号墳（中期）	18 山戸古墳群（弥生末～古墳後期）	35 門前遺跡（縄文晩期～弥生前期・古墳前期・鎌倉）
2 朝臣7号墳（中期）	19 丁古墳群（古墳後期）	36 宝記山古墳群（弥生末？）
3 稲富遺跡（縄文後期～室町）	20 丁山頂古墳群（前期・後期）	37 袋尻浅谷遺跡（弥生前期・古墳後期）
4 朝臣才ノ木遺跡（縄文中期～室町）	21 大津茂川川床遺跡（縄文晩期～弥生中期）	38 金剛山古墳群（弥生末・古墳後期）
5 中島上古気遺跡（弥生前期～中期）	22 川島遺跡（弥生中期～鎌倉）	39 釜屋遺跡（江戸）
6 山王山古墳（前期）・小丸山古墳（後期）	23 丁・柳ヶ瀬遺跡（縄文中期～平安）	40 向池遺跡（旧石器）
7 権現山古墳群（弥生末～古墳時代後期）	24 関ノ口遺跡（縄文後期～弥生前期～古墳後期）	41 亀田遺跡（弥生・古墳・中世）
8 碓岩南山遺跡（旧石器・古墳後期・平安・鎌倉）	25 宮田遺跡（縄文後期）	42 坊主山遺跡（旧石器・縄文・平安）
9 碓岩古墳群（中期～後期）	26 和久遺跡（弥生中期～古墳後期）	43 平方遺跡（縄文～古墳・平安・中世）
10 岩見北山遺跡（古墳初頭・後期）	27 坂出遺跡（縄文後期～弥生）	44 城山遺跡（縄文～古墳・中世）
11 岩見油田散布地（縄文晩期）	28 高田区整遺跡（弥生～古墳後期）	45 助久五反畑遺跡（縄文～弥生）
12 綾部山古墳群（弥生末～古墳後期）	29 沖代遺跡（縄文後期）	46 鶴遺跡（縄文・弥生前期・中世）
13 興塚古墳（前期）	30 （仮）朝日谷遺跡（縄文後期）	47 片吹遺跡（縄文前期～晩期・弥生～平安）
14 武山古墳（前期）	31 立岡遺跡（縄文晩期～中世）	48 松ヶ下北遺跡（縄文～古墳）
15 古網干遺跡（鎌倉～室町）	32 東南・東保遺跡（縄文後期～弥生～中世）	49 中出遺跡（縄文・古墳・中世）
16 辺作遺跡（縄文後期～弥生・室町）	33 斑鳩石田遺跡（縄文～弥生～古墳前期）	50 福地相坂遺跡（弥生前期）
17 丁瓢塚古墳（前期）	34 常全遺跡（縄文晩期・古墳後期）	

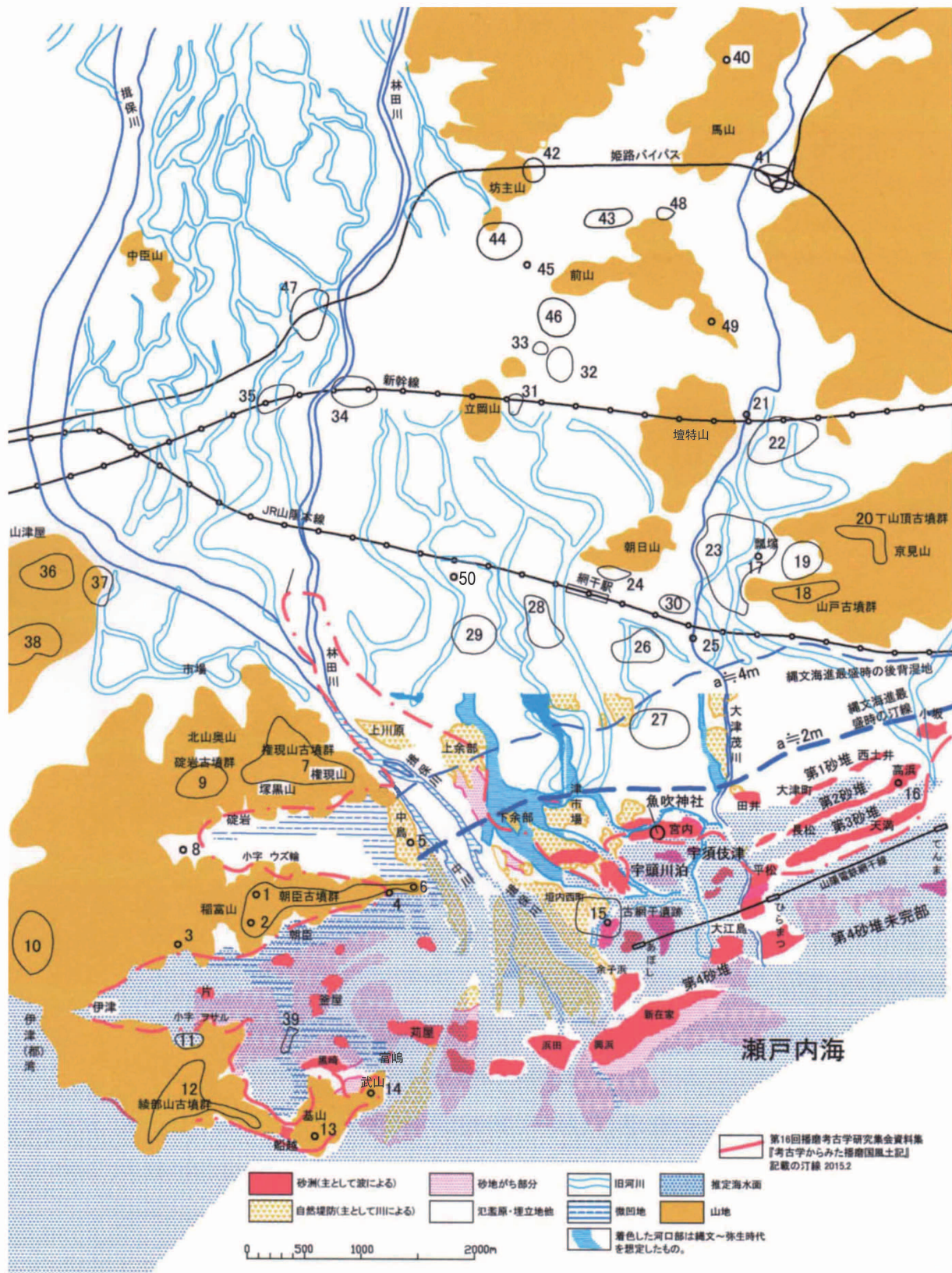


図20 網干デルタ古景観の復元模索と遺跡分布—砂堆をめぐる—

第3章 調査に至る経緯と経過

第1節 御津町の遺跡調査履歴

1970年～2005年にかけての御津町の考古学に関する報告・論考について、旧御津村を中心に時系列で紹介する。

1) 1970年 萬代和明「前山古墳群」『古代揖保川流域文化の一端』兵庫県立龍野実業高等学校生徒会考古学部（※当時17歳の萬代の記録）

前 山 古 墳 群

この古墳群の位置する揖保郡御津町碓岩は、東に揖保川が流れ、南には瀬戸内海がきれいにながめられる標高120mの山の山頂にあります。またこの古墳群の両側（南側と北側）には平野がある。このことから揖保川の河口の形成した肥沃な沖積平野を基盤として、農耕生産が増大した集落の支配者の墳墓と見なすことができるだろう。この古墳群は山頂に3基がほぼ一直線にならんでいます。そして一番北から順に1号墳、2号墳、3号墳とよぶことにします。まず1号墳は3基の中でいちばん高い所に築造されており、まわりには円筒埴輪が植えられています。と言うのは埴輪片が多数散らばっていたからです。1号墳のすこし下にある2号墳は、1号墳と同じく円筒埴輪が植えられている。また列石らしきものもあります。また鉄鋤片が1つ落ちていました。1番南にある3号墳は、1、2号墳と同じく埴輪が植えられていた。しかし、1、2号墳にくらべて埴輪片が少なかった。又、鉄鋤片が1つ落ちていた。その2つの鋤片は同じものだと思う。この付近の古墳には南の海岸線沿いの山に興塚古墳（前方後円墳 全長100m）、綾部山古墳群があり、北には150基ほどあろうと言われる権現山古墳群がある。又東には小丸山古墳がある。興塚、綾部山古墳群の中のほとんどの古墳、小丸山古墳、権現山古墳群の中の古墳には、前山古墳群と同じく円筒埴輪が用いられている。また前山古墳群の近くには、もう少し古墳があるだろうと思う。

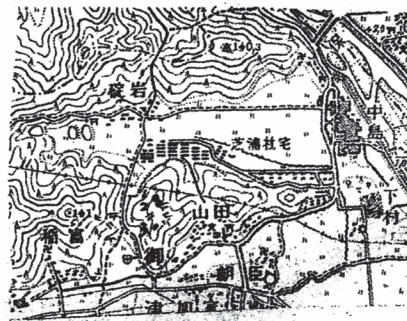


図1 前山古墳群の紹介文

これは朝臣山（前山）古墳群の初出文献だが、現在の知見を踏まえて、以下の様に訂正する。

- ・2行目：標高120m ⇒ 103.5m
- ・11行目、15行目：鉄鋤片 ⇒ 鉄器片
- ・21行目：前方後円墳 100m ⇒ 110m（但し、昭和36年（1961年）に前方部は土砂取りで消滅）

【備考】

- ・兵庫県立龍野実業高等学校は、兵庫県立新宮高等学校と2010年の発展的統合により、現在、兵庫県立龍野北高等学校となっている。
- ・当時の文面では、前山古墳群1号墳・2号墳・3号墳と呼んでいるが、朝臣4号墳・5号墳・7号墳と同一の古墳である。

2) 1971年 『綾部山古墳群調査報告書』御津町教育委員会

昭和42年（1967年）に、地元によって国有地の梅林化計画が進められた。日本各地でくり返されている開発と破壊から祖先の残した貴重な文化財を子孫に残そうと、保存対策の一つとして緊急測量調査をした記録である。※第6章第3節で一部紹介

3) 1975年 『御津町岩見地区遺跡分布調査』御津町教育委員会岩見地区遺跡分布調査団



図2 御津町岩見地区の遺跡分布調査参加者記念写真

1973年春に、保養所用地造成計画がもちあがり、兵庫県教育委員会が業者に対して遺跡分布調査を行うよう指導し、報告を受けた御津町が、「月曜会」に遺跡分布調査を依頼して行った。

当時の県教委是川 長指導主事・町教委上山修平次長と、業者の大末地所・大末建設との調整後、月曜会の上月昭信・中村信義の両

氏を中心とする34名による調査記録である。図2の中には、今回朝臣山古墳群の実測調査に参加した原田一博と萬代和明の姿もあった。※上左二人目・原田、下左・萬代

4) 1988年 中溝康則「播磨地方における発生期の前方後円墳と土器について」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』網干善教先生華甲記念会

文中に、播磨の墳墓と発生期の古墳を記載しており、その中に御津町の岩見北山積石塚1号墳墓・岩見北山積石塚3号墳墓・権現山50号墳・権現山51号墳などがある。墓に葬られた人々の生活場所と墓を密接に捉え研究する事と、墳形や列石・埋葬法・祭祀の形態は異なるが、土器などの編年を研究する事により、前方後円墳の出現が解明されるであろうとの論考。

5) 1991年 近藤義郎ほか『権現山51号墳』権現山51号墳発掘調査団

退官前の近藤義郎氏（当時岡山大学教授・故人）率いる岡大考古学専攻生と他大学考古学専攻生が

結集し、学術研究の為発掘調査を行った。播磨の研究者の松本正信・加藤史郎両氏（二人とも故人）が1962年頃に埴輪片を採取していた。1965年頃、岡山の都月坂2号墓の発掘見学に参加した松本氏が都月坂2号墓出土の資料と権現山51号墳で採取したものがよく似ている旨を近藤氏に話した。日を置かずして現物を持参し、その埴輪が特殊器台形埴輪であると認識された経緯がある。その後の平成元年（1989年）に、最古型前方後円（方）墳の追究のために発掘され、その成果は多大なものであった（図3）。竪穴式石槨からは5面の三角縁神獣鏡が出土している（図4）。当時の参加者の多くは、現在全国各地で考古学を主導している。

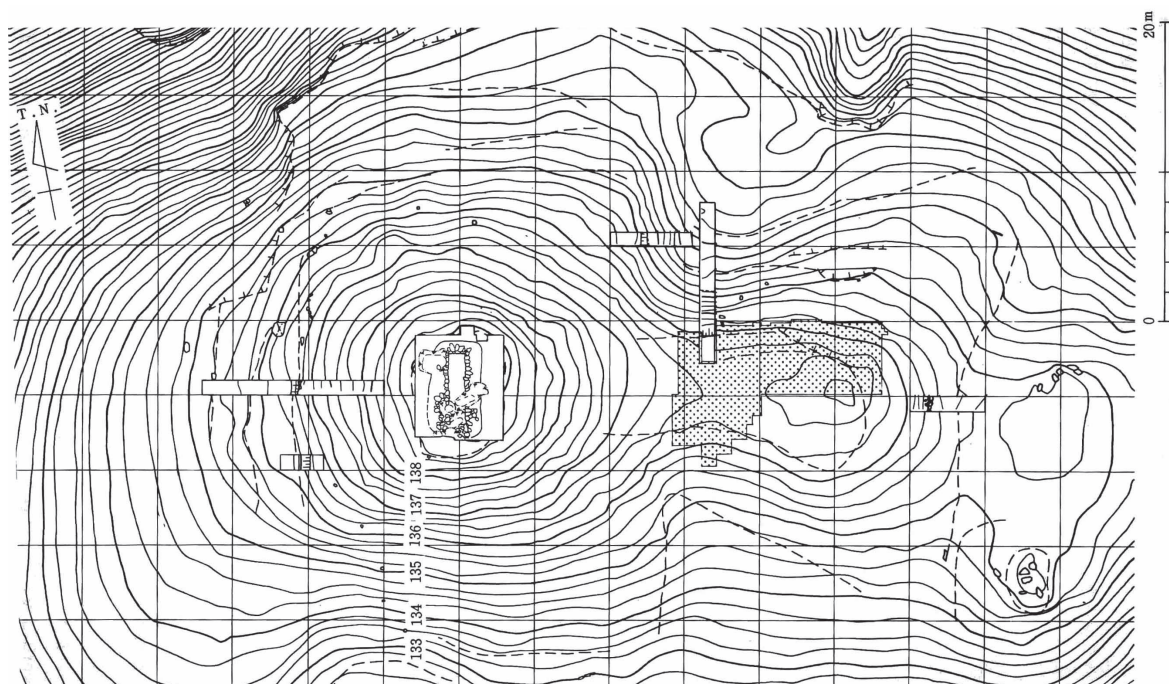


図3 権現山51号墳墳丘測量図



図4 権現山51号墳主体部遺物出土状況

6) 1991年 松本正信『綾部山13号墳緊急調査実績報告書』綾部山13号墳緊急調査団

綾部山13号墳の墳丘に当たる部分がブルドーザーで削り取られたため、緊急調査が行われた。残丘部分もすべて埋め戻して保存することとした。

7) 1992年 中村 浩「兵庫県揖保郡御津町出土須恵器について 東京国立博物館列品の検証」『大谷女子大学紀要』第27号 第1輯 大谷女子大学志学会

明治43年(1910年)に地元地権者により発掘されたとの記録が書かれている。現在では前方後円墳の小丸山古墳と登録されているが、当時は後円部を「中の塚」、前方部を「西の塚」と呼んでいたことが記されている。中の塚の石室内から多くの遺物が出土し、その中でも3個の装飾付須恵器(報告書では装飾付き壺と記載)を、紹介している(図5)。

尚、当時は横穴式石室の石が重く、天井部分にダイナマイトを使用しての発掘であり、前方部(西の塚)においては、59年後の昭和44年(1969年)に重機による土取りで奥壁の巨石を取り除くのを自宅二階から目撃していた(当時、高校生であったが心の中で、やめてくれと叫んでいたことが、今も蘇る)。後で知ったのだが、オペレーターはその奥壁の巨石と重機の下敷きになり亡くなったと

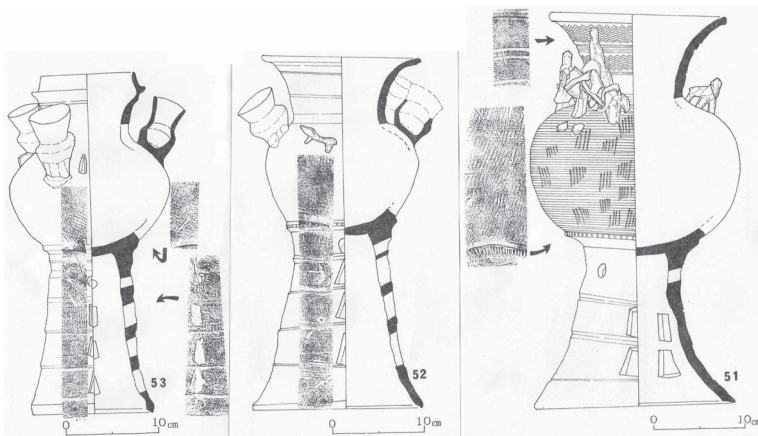


図5 小丸山古墳出土の装飾付須恵器

いうことである。遺物は当初から東京国立博物館で保管されている。この古墳は横穴式石室採用となる古墳時代後期のはじめと位置づけられ、龍野高校のグラウンドになる前に存在した「西宮山古墳」と合わせ著名である。

尚、小丸山古墳の東側には、竪穴式石室がむき出しになった山王山古墳が存在し、「東の塚」と呼ばれていた。

8) 1995年 『碓岩南山遺跡Ⅰ』兵庫県揖保郡御津町教育委員会

御津北地区県営圃場整備に伴う事前調査の報告書である。碓岩南山遺跡A地点の発掘調査では、播磨地方南部において初めて旧石器時代の遺構(石器類ブロック 2群)を良好な状態で検出した(図6)。類例が少ない貴重な成果である。

9) 1996年 『碓岩南山遺跡Ⅱ』兵庫県揖保郡御津町教育委員会

前年度報告の碓岩南山遺跡の追記報告と、現中島集落の東側にある中島上吉氣(かみよしき)

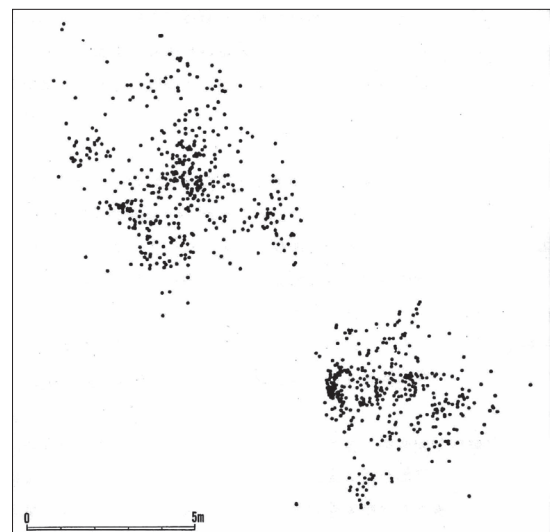


図6 碓岩南山A地点石器ブロック図

遺跡（巻頭図版2参照）や権現山南裾の低平野部に位置する中島燈明田遺跡の発掘調査報告書である。

中島上吉氣遺跡では、揖保川の土砂の堆積によって自然堤防の微高地が形成される前の旧流路内より、コンテナ40箱を数える弥生時代前期から中期にかけての弥生土器が出土した。

中島燈明田遺跡では、出土遺物はコンテナ3箱を数え、その内訳は、旧石器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・土錘と多様で、旧石器時代から近世に渡る複合遺跡である。

10) 1996年 『碓岩南山瓦窯』〈郷土の歴史シリーズ〉リーフレット 兵庫県揖保郡御津町教育委員会

御津北部地区圃場整備事業に伴う平成7年（1995年）の発掘調査において、碓岩で原形を留めたまま発見された窯跡である（図7・8）。平安時代のロストル式平窯である。この窯で焼成された瓦は、貞観10年（868年）の貞観播磨地震直後の復興用瓦と考えられている。付近には、古墳時代からの須恵器生産地（碓岩朝地窯跡群など）も多く存在している。



▲単弁13葉蓮華文の軒丸瓦



▲単弁12葉蓮華文の軒丸瓦

図7 碓岩南山瓦窯出土の軒丸瓦



図8 碓岩南山瓦窯の検出状況

11) 1997年 『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』兵庫県揖保郡御津町教育委員会

平成6年（1994年）度から平成8年（1996年）度の3カ年の土日祝日の天候の良い日に実施した、御津町全域の分布調査の報告である。合計363カ所の遺跡を登録しており、内、310基が古墳で、新規発見の古墳は190基前後であった。

御津町内の埋蔵文化財分布の基本になる報告書であり、多くの情報がつまっている。

12) 1998年 中溝康則「西播磨における積石塚墳墓群について」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』網干善教先生古稀記念会

11) で紹介した分布調査で確認した岩見北山山麓に7基の積石塚墳墓群（岩見北山積石塚1～7号墳墓）に言及している。この論文は、高松市下川津B類土器を含めて四国（阿波・讃岐）の積石塚と関連がある弥生時代終末期の積石塚についての考察である（図9）。

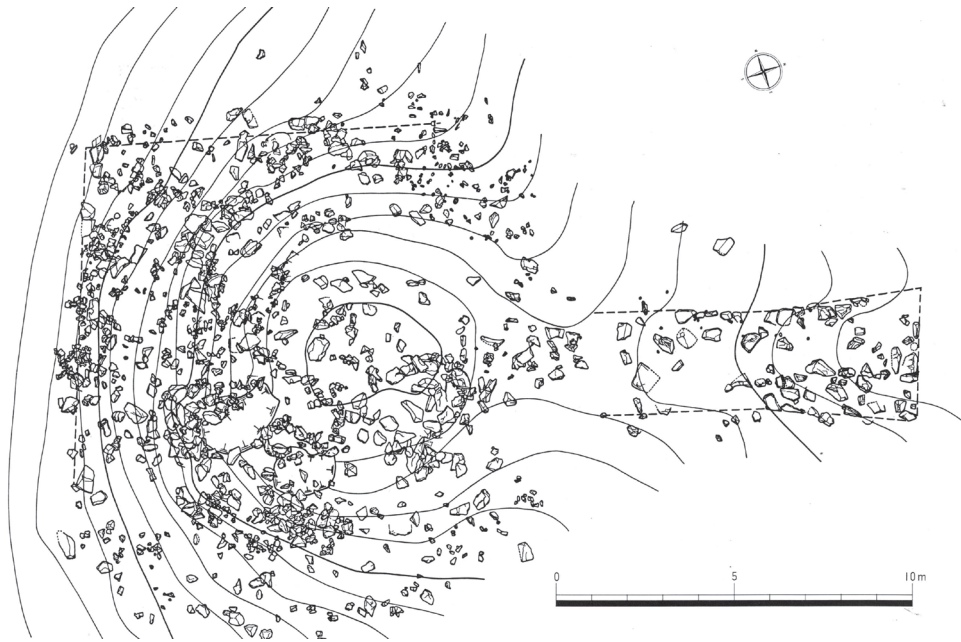


図9 前方後方形の岩見北山積石塚4号墳墓墳丘測量図

13) 2002年 『釜屋遺跡 近世製塩遺跡 現地説明会資料』御津町教育委員会、 2008年 芝香寿人『御津の塩田』〈西播磨高齢者大学 郷土研究クラブ 講演会資料〉

塩田技術の先進地であった、荒井（高砂市）・的形（姫路市）の塩田から正保年間（1645～1648年）に伝わった入浜式塩田の遺跡である（図10）。江戸時代の正保郷帳（1646年）に山田・釜屋・黒崎村の項に「塩浜あり」とか苧屋村の項には「塩屋あり」との文献記録（表1）がある。古文書から170年間前後の操業が読み取れるが、文化10年（1813年）に、丸亀藩から不許可になったとの記録がある。現在より僅か200年前まで操業していたにも関わらず忘れられていた塩田・製塩の場所が、発掘により特定できたのは貴重なことである。

赤く焼けた丸石が大量に出土し、水尾（みお・海水を導き入れる水路）と木樋・釜屋（濃縮した鹹水を煎熬する施設）跡を検出した。遺物は、陶器・磁器・寛永通宝・キセルや多数の木片である。



図10 釜屋遺跡の塩田遺構検出状況

表1の村高は米の生産高で、釜屋村では天保5年と元禄15年と比較し40倍に増加している。これは文化10年（1813年）に丸亀藩から製塩が不許可になり米生産に変わったためと推測できる。

表1 播磨国郷村高表に記載されている各村の村高

	正保3年（1646年）	元禄15年（1702年）	天保5年（1834年）
苅屋村	522石1斗6升2合	522石1斗6升9合	781石7斗8升5合
釜屋村	5石1斗8升2合	5石1斗8升2合	202石6斗1升
黒崎村	302石8斗6升2合	302石8斗6升2合	471石2升3合

14) 2003年 『稲富遺跡』兵庫県揖保郡御津町教育委員会

御津町西部地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査の報告書である。稲富遺跡は、朝臣字浅地に位置するA地区と、岩見字池田に位置するB地区に分けられている。A地区は縄文時代から室町時代後期にかけての遺跡で、B地区は弥生時代から室町時代後期の遺跡である。なお、B地区では、奈良時代の遺物の多さから、寺院の存在が推定できる。

15) 2003年 中溝康則「西播磨における5世紀後半の低位墳丘墓の出現について」『関西大学考古学研究室五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室五拾周年記念刊行会

この論文は、西播磨における5世紀代後半（古墳時代中期後半）、すなわち横穴式石室古墳出現前の須恵器を伴う低位墳丘の古墳群（32頁コラム1参照）について述べている。古墳群として、①御津町綾部山古墳群、②たつの市タイ山古墳群、③揖保川町黍田古墳群、④御津町朝臣山古墳群（図11）を取り上げている。



図11 2000年段階の朝臣山古墳群（2度目）と周辺古墳の分布図

5世紀の首長墓が少ないと思われていた揖保川水系だが、朝臣山古墳群などの発見により、5世紀が空白でないこと、6世紀代に入って横穴式石室が爆発的に造られていくその素地原型は5世紀からできていたことを述べている。

5世紀の首長墓が少ないと思われていた揖保川水系だが、朝臣山古墳群などの発見により、5世紀が空白でないこと、6世紀代に入って横穴式石室が爆発的に造られていくその素地原型は5世紀からできていたことを述べている。

16) 2004年 上月昭信『播磨地方における6世紀・7世紀の須恵器生産』私家版

窯跡で採取した須恵器や発掘調査報告書等に掲載されている須恵器をもとに、播磨の6世紀・7世紀の須恵器窯114基のうち、101基の編年を行っている。さらに、杯を中心に、88基の窯資料の観察表と49基の窯資料の実測図を掲載した労作である。

御津町の碇岩古窯跡群については、窯の位置や焼成時期を考慮して再分類を行い、碇岩南山窯A（中池窯）・碇岩朝地窯A・碇岩朝地窯B（旧碇岩窯）をTK10型式に比定して、この中でやや先行する碇岩南山窯Aは、揖保川流域で確認できる最古の窯と位置付けられている。また、碇岩南山窯Bは、飛鳥時代の下るTK48型式とみている。

17) 2005年 芝香寿人・中溝康則ほか『綾部山39号墓発掘調査報告書』揖保郡御津町教育委員会
町道黒崎綾部山線改良工事に伴う調査である。当初は一週間での予定で進めたが、何と全国でも稀な弥生時代終末期の墳墓であり、2回に分け延べ100日以上が発掘調査となった。多くの特徴を持つ墳墓で、主体部は石積み囲いと竪穴式石槨を併用し、コウヤマキの木棺を納めていた(図13)。さらに、列石・小円礫帯を伴うことや、排水溝も確認できた。遺物は破碎された画文帯環状乳三神三獣鏡(図12)・管玉・砥石・土器片、ヤリガンナ・石杵など多彩で、また、魔よけとされる水銀朱が棺内にみられるなど、弥生墳墓から古墳への過渡期の研究では欠かせない墳墓である。

当時、2回の現地説明会と成果報告会には、それぞれ数百人の人々の参加があった。現在は説明版が設置され、発泡スチロールを用いたEPS工法により、拡張された道路下に保存し後世に残されている。尚、出土遺物の一部や写真パネルは、文化庁主催「発掘された日本列島2004」の新発見考古速報展にて、全国7ヶ所の博物館で展示された。また、新用語「阿讃播連合」(名付け親は中溝康則氏)は、ここから生まれた。



図12 綾部山39号墓出土の画文帯神獣鏡



図13 発掘調査中の綾部山39号墓の主体部 (2003年8月23日 沖田明信氏撮影)

18) 2005年 白谷朋世「播磨国揖保郡の港についての一試論 一五泊と朝臣オノ木遺跡の検討一」『待兼山考古学論集 都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学友の会

兵庫の五泊(河尻・大輪田泊・魚住泊・韓泊・室泊)の比定を行い、古代の揖保郡では廃寺と駅家、古代集落や墨書土器・硯・緑釉陶器・灰釉陶器の分布を紹介して、オノ木遺跡の特異性を述べている。また、古代の港には、海上交通の安全のための港(例えば室津)がある一方で、物資・人の中継地(例えば朝臣オノ木遺跡)のような港の存在を指摘しているが、「船越」が現在の「新舞子」であることを知らなかったため、矛盾もある。

19) 2005年 中溝康則・芝 香寿人「朝臣オノ木遺跡概報」『ひょうご考古』第11号 兵庫考古研究会

揖保郡御津町朝臣オノ木・字妙泰に位置する朝臣オノ木遺跡は、平成13年(2001年)に開発計画が持ち上がり、御津町教育委員会により試掘調査が行われ、平成14年(2002年)に4,700m²の本発掘調査が行われた。縄文時代中期・後期、弥生時代前期・中期、古墳時代、奈良時代、平安時代、平安時代後期から鎌倉時代初め、室町時代と多岐にわたる複合遺跡である。御津町で最古クラスの須恵器が出土している。(第6章図2参照)

20) 2005年 白谷朋世「オノ木遺跡出土の遺物 ―緑釉陶器を中心として―」『ひょうご考古』第11号 兵庫考古研究会

上記記載18)・19)の朝臣オノ木遺跡出土遺物の内、緑釉陶器にしぼった詳細な論考である。山口県(防長)産を含む40点以上の緑釉陶器の存在から古代の石海里の中心部に該当するという考えのみならず、揖保川の舟運と瀬戸内海の中継地という性格付けが興味を引く。

以上20件の御津町の考古学に関する文献を紹介した。朝臣山古墳群に関連するものは、1)・7)・11)・14)・15)・16)・18)・19)・20)があり、多岐にわたる。また、1)では、朝臣4号・5号墳の位置する所は碓岩字前山で、地元では「前山」と呼んでいることから、前山古墳群として「前山1号墳」・「前山2号墳」・「前山3号墳」の記載だが、考古学の目で見たと一番古い報告であろう。後の11)の分布調査で「朝臣4号墳」・「朝臣5号墳」・「朝臣7号墳」と報告したものと同一の古墳である。尚、朝臣山には全国的に有名な、九州から運ばれた阿蘇熔結凝灰岩製の環状把手付き舟形石棺の蓋が、昭和33年(1958年)に配水池工事で見つかったが、これは消滅した朝臣1号墳に伴う。

このように、発掘した遺跡・古墳はほんの一部であり、まだまだ地中に埋もれている可能性がある。特に、三つの山塊(綾部山、朝臣山、権現山)と岩見港から揖保川町河内の平野部に抜ける岩見坂の尾根・山裾に多くの古墳が築かれ、たまたま開発から逃れた場所であったおかげで残存しているが、過去に学術研究のために発掘調査したのは権現山51号墳のみである。このように御津町には多くの古墳があるため、「ロマンあふれる御津」と呼ばれてきたのである。

なお、『御津町史』・近隣の『市・町史』、播磨考古学研究集会(第1回~第21回)の「資料集」や「記録集」などは割愛した。まだ埋もれた報告書などがあるかも知れぬが、知る限りの物を掲げた。詳細は、夫々の文献を参照していただきたい。

備考：その他、参考になる文献

- ・ 岩井顕彦ほか 2011『揖保川流域の前期古墳・墳丘測量と出土遺物の再検討』西播磨古墳時代研究会
 - ・ たつの市風土記ゼミナール 2016『新解 播磨国風土記揖保郡条』たつの市教育委員会
 - ・ 香芝市二上山博物館 2011『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』学生社
- ※報告書の一部は、奈良文化財研究所の『全国遺跡報告総覧』を検索すると便利である。

第2節 調査日誌

※測量調査は令和2年（2020年）1月29日～3月21日に実施した。それ以前の計画・準備・伐採作業は省略している。

- ◇1日目 1月29日（水）晴れ
参加者：塚本・田路・中溝・原田・萬代
4号墳北面と東面の伐採作業並びに1mごとに杭打ち実施。
- ◇2日目 1月30日（木）晴れ
参加者：辻本・田路・中溝・原田・萬代
4号墳北面と東面の伐採作業と伐採材の片付け。
- ◇3日目 2月2日（日）晴れ
参加者：川人・辻本・田路・原田・萬代
東面をさらに1m下まで伐採並びに片付け。基準点設定。
- ◇4日目 2月7日（金）晴れ
参加者：田路・中溝・原田・萬代・渡辺
平板測量開始。1/200の50cmコンタとする。道具のトラブルあり。山頂（103.5m）より101.5mまで測量し、鉄塔も記入。
- ◇5日目 2月9日（日）晴れ
参加者：川人・辻本・田路・中溝・原田・萬代
コンタ99mまで測量。里道と山道も一部記入。
- ◇6日目 2月11日（火）晴れ
参加者：辻本・中溝・原田・萬代・渡辺
4号墳の東南と西南のコンタ96mまで測量。報告書作成案を萬代より提示。
- ◇7日目 2月23日（日）晴れ
参加者：川人・田路・中溝・原田・萬代
4号墳の東側と北側のコンタ95mまで測量。あと2～3日で4号墳は終了の見込み。7号墳も測量するかどうか検討。
- ◇8日目 2月28日（金）晴れ
参加者：田路・中溝・原田・萬代・渡辺
4号墳の西北部の測量。
- ◇9日目 3月1日（日）晴れ
参加者：田路・中溝・原田・萬代・渡辺
4号墳の残りを完成させ、5号墳の測量開始。たつの市教育委員会の義則敏彦氏来訪。
- ◇10日目 3月6日（金）晴れ
参加者：辻本・田路・中溝・原田・萬代
5号墳の東側と西側の測量を終了し、レベルを7号墳へ移動（基準点86.5mとする）。帰りにコピー店により4号墳の図面コピーと電子データの取り込み。
- ◇11日目 3月7日（土）薄曇り
参加者：川人・辻本・田路・中溝・原田・萬代・渡辺
7号墳の伐採・草刈りと落葉清掃。杭打ちし平板測量開始。1/200の25cmコンタとする。
- ◇12日目 3月9日（月）晴れ
参加者：萬代・道本
4号墳上空150mからのドローン撮影実施（静止画と動画）。
- ◇13日目 3月12日（木）晴れ
参加者：辻本・田路・中溝・原田・萬代
7号墳平板測量実施。母親3人と小学生の訪問あり。中溝が説明対応する。
- ◇14日目 3月14日（土）雨のち曇り
参加者：塚本・田路・中溝・原田・萬代・渡辺
雨の為、みはらしの森管理棟にて今後の報告書作成などの打ち合わせを実施する。
- ◇15日目 3月21日（土）晴れ
参加者：川人・辻本・田路・中溝・原田・萬代・渡辺
7号墳平板測量完了。5号墳南側のコンタライン2～4本追加し全測量完了。午前中、郷土史家の井上末廣氏が来訪。

第4章 墳丘の測量

朝臣4号・5号墳の墳形を確認するため、平板測量及び水準測量により朝臣4号・5号墳の平面図と断面図を作成した。さらに、朝臣7号墳の平面図も作成した。尚、測量調査に当たり、基準点は国土地理院の三等三角点103.5mから水準測量を行った。

測量の結果、各古墳の墳形・規模については以下の様に理解した。4号墳は(図2・3) 標高97.5m付近を墳裾とみると、直径約50m、高さ約6mの円墳である。4号墳に南接する5号墳(図2・3)は列石のある標高96.5m付近を墳裾として、南北約24m、東西約28m、高さ約2.5mの略方墳とみなす。したがって、現段階では4号墳と5号墳を一体の前方後円墳にすることはできず、別の古墳と判断した。

また、7号墳(図1)は列石を墳裾とすると、直径約24m、高さ約2.5mの円墳である。

第1節 平面図

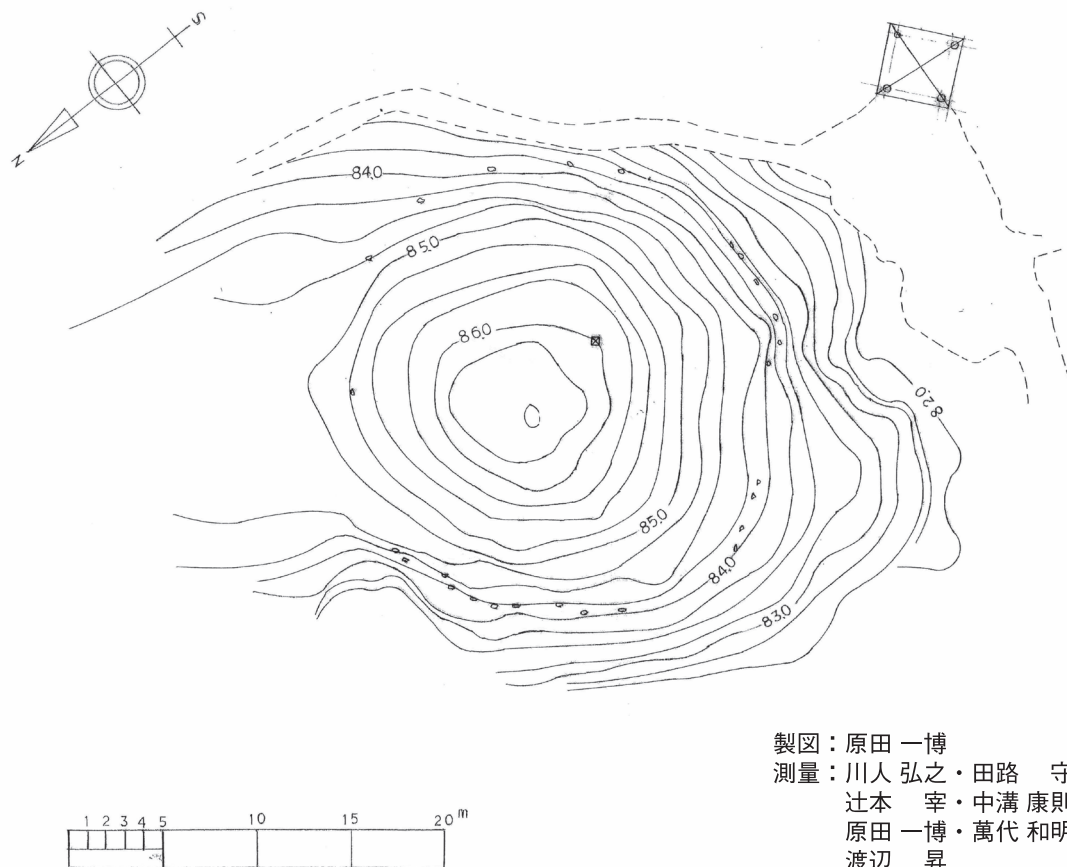


図1 朝臣7号墳平面図(縮尺1/400)

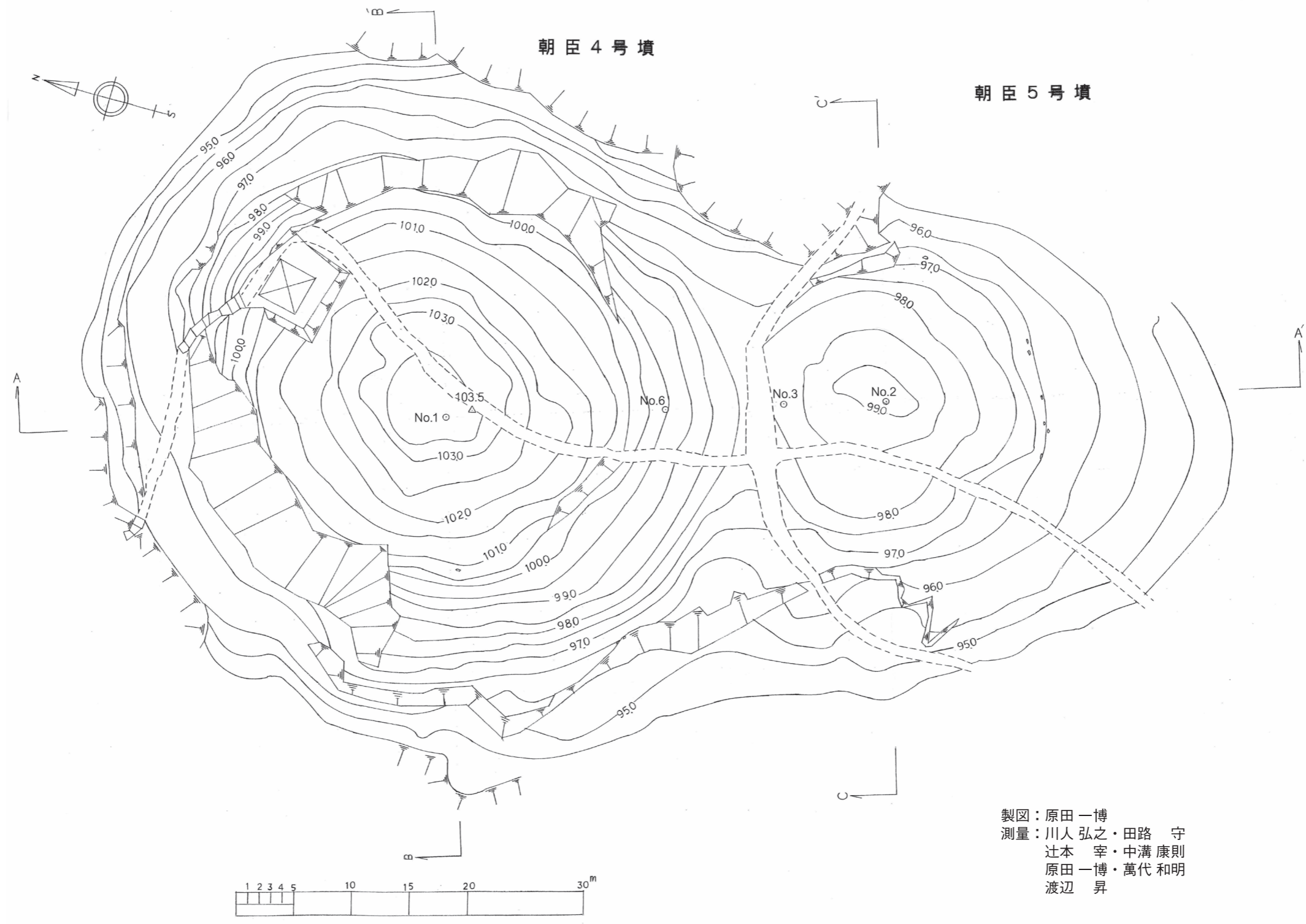


図2 朝臣4号・5号墳平面図（縮尺1/400）

第2節 断面図

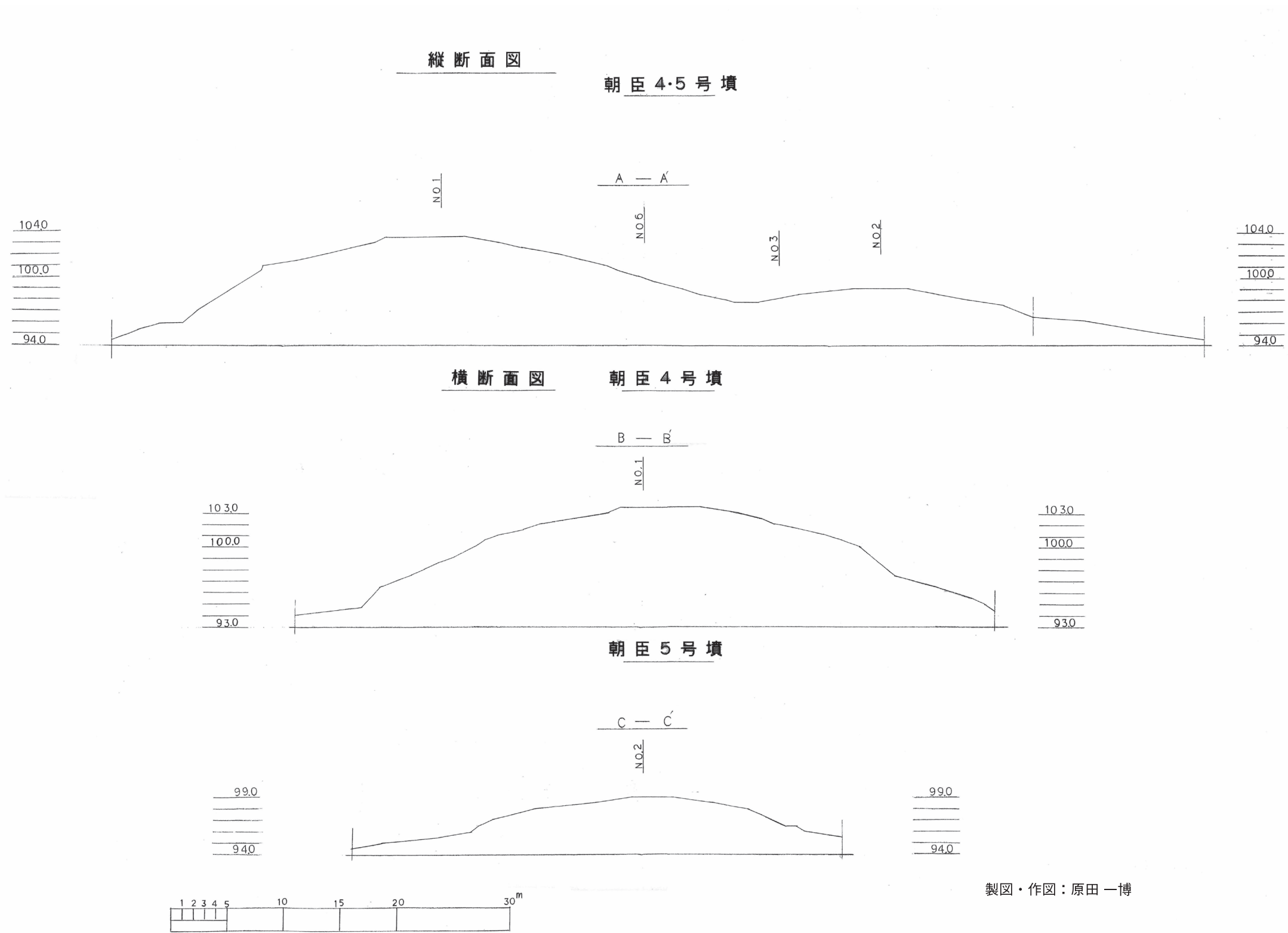


図3 朝臣4号・5号墳断面図（縮尺1/400）